
『E』の測定不能?

葵（仮）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

？測定不能？の『E』

【Nコード】

N2782S

【作者名】

葵（仮）

【あらすじ】

彼の武偵としてのランクは最低の？E？である。だが？E？に未知数を掛ける事によつて、その？E？は変わる。そう、未知数？X？を掛ける事によつて、文字通り？EX？、測定不能へと。

作者多忙（受験生＋連載合計3本＋PSP02ユーザー）につき、超遅筆です。それでもよろしければ。そして題名は『緋弾のアリア——未知数の？E？』からこれに変わりました。ご了承ください。

第零弾（前書き）

どうも、こんばんわ。知ってる人は知っている作者、葵（仮）で御座います。

この度は、こんな思いつき文を開いて頂き、誠にありがとうございます。

まず、諸注意を。

荒筋にも書かせていただきましたが、作者多忙に付き更新はとても遅いです。また、一巻一巻友達に借りながら書いていますので作品途中で矛盾が生じる可能性があります。その場合はなんとかオリジナル設定を持ち出して軌道修正をします。さらに、この小説の主人公は作品内のもとからいたオリキャラ、つまり転生者などではありません。

以上のことを踏まえたうえで、お読みください。

これは余談ですが、もう二本の連載小説のほうも満遍なく書かせていただきます。てか、書ける話から書いていきます。つまりは、妄想が膨らんで固まった小説から更新していくという感じですね。よろしければ、そちらもどうぞ。

では、緋弾のエリアー未知数の”E”——始まります。

第零弾

武偵とは、『武』装した探『偵』のことをさす。
また、公に武装することを許可された探偵、とでも言うのである
うか。

凶悪化する犯罪に対して新設された国際資格であり、様々な特権
から警察行動に順ずる行為を行う事が許可される。

だがしかし、警察とは似て非なり。

武偵は探偵。探偵とは依頼主クライアントの依頼を受け、『報酬』を受け取る
事によって活動する。

近所の猫探しから、浮気調査、はたまた犯罪者の逮捕など。

簡単に言えば、
体ていのいい、『便利屋』なのだ。

東京武偵高校。

武偵高校、通称武偵高。レインボーブリッジ南に浮かぶ、南北2
キロ、東西500メートルの長方形の人工浮島メガフロートである。

そこでは一般的な勉学の他、武偵になるための専門科目を履修す
ることができる。

この物語の主人公は、本来の主人公ではない。
いや、本来このような登場人物キャラクターはいない。

だが、彼はそこにいる。

数多の平行世界の中、この一つの世界で。

彼がいる、可能性の物語。

そう、彼の名は

第零弾（後書き）

今日中に次も投稿したいです。うん、むりぽ。

というか、このプロロはあんまし意味ないですね。原作中にありま
したし。

キーワードに一応原作既読推奨が入っていますのでw
では、また。

第一弾（前書き）

早速、予約で投稿。できたっちゃあできたけど、いかがでしょうか。主人公の名前はほんっとにそのときのインスピレーションだけで決めました。

では、どうぞ。

第一弾

第一弾

『スナイパー狙撃手』 / 『インクスタ探偵』

4月5日、晴れ。ピーカン。うざったいほどに天気がいい。

俺の周りを歩くガキや同世代のやつらは、丁度いいなどとほざいてはいるが、俺はそうは思わない。

俺は雨の日が好きだ。そういう日は、傘を差さずに外へ出てばーっとしていたい。

知り合いやクラスメイトには変だと言われはするが、気にしない。何故なら、俺がそうしたいから。

4月5日。世間一般では、基本的にこの日に入学式などが執り行われる。

無論、武偵高も例外ではなく、今日は始業式だ。それも、外でだ。

何でこんな晴れた日に、うだうだとどうでもいい校長の話など聞かなければいけないのか。

時間の無駄だ。だが、そんな柵しがらみから簡単に抜け出せないのが、学生という身分である。

……と、今の状況に戻そう。

正直に、正直に、だ。何でこんな日に野郎のところに行かなければいけないのか。

仕方なく、俺は目の前のドアのチャイムを鳴らす。
ピンポンという、子気味いい音が静寂に響く。

タツタツと、人がドアに近づいてくる足音がする。
ピタッと止まったかと思うと、数秒たってからやっとドアが開く。
恐らく、ドアの内側の覗き穴から一度外を窺ったのであろう。

出てきたのは、黒髪ロングの少女。

確か、あいつの幼馴染だったか。

こんな朝早くに男子寮に女、それもこんな美少女を連れ込むとは、
あいつも中々やるな。

まあ、この子がどんなにあいつに好意を持っていようと、当の本人があのだ鈍感っぷりでは、案じられる。

ま、俺には彼女がいるからあまり興味は無いんだが。

「あ、あいちゃん。キンちゃん、あいちゃんが来たよー」

俺のことをあいちゃんと呼ぶこの美少女は、星伽白雪。

確か、超能力捜査研究科（SSR）だったか。

とりあえず、俺は白雪に対して訂正の要求の意を表す。

「あいちゃん言うな、バカ。俺の何処が『ちゃん』づけだ」

.....

一瞬の沈黙。

「……………え？」

白雪はハッとしたあと、ありえないものを見る目で俺を見、口に出そうとした。

俺の禁句^{タブー}を。

「だってあいちゃん、女のk——」

言葉の最後を言おうとした瞬間、白雪の口が彼女の背後から出てきた手によって塞がれる。

「ぎ、ぎりぎりセーフ」
「ん、キンジ」

白雪の口を塞いだのは、白雪の想い人、超鈍感男である、まるでエロゲの主人公、遠山キンジ。

前述したとおり、どうでもいいが。

あ、俺は列記とした男だぞ？ 疑うなら見せてやろうか、証拠。
いや、見せないけど。

「何もいわなかったよな？ な？」

心配そうな顔でキンジが聞いてくる。

その問いに対して、俺は無難に答える。うん、無難に。

「大丈夫。女のー、までしか聞こえなかった。でもなんとなくキンジを殴る」

「ええ！？ なんでえ！？」

「へっへーい！ 問答無用！」

渾身の力を込めた右ストレートでLet's 鳩尾！
みぞおち

殴った瞬間、キンジが倒れるが、キンジが口を塞いでいた白雪も同時に倒れてしまった。

「うつ……吐きそう………つて、うわっ！」

目を回しながら、キンジは立ち上がろうとするが、丁度いい具合にお腹の上に白雪が倒れているので身動きが取れない。

そう、普通に見たら白雪がキンジを押し倒しているような姿で。それも、玄関先で。

今誰かと会ったら盛大な勘違いをされそうだった。俺に関係ないからいいが。

フラグ？ 何それ。

「ちょ……秋穂……あおい……助けてくれ………このままだと……やばい」
「あっらら？ キンジくんはこんなときに男の本能がとか言い出さが

「しちゃうわけですか？はっは、いいご身分じゃあないですか」

「て、てめえ、分かっててやってるだろ……」

「ええ？ 何があ？」

「こ……こいつは……」

「分かった分かった。ほら、白雪起きろ。ガッコー遅刻すつぞ」

俺は白雪の手を引っ張って起き上がらせる。いやあ、軽い。

たぶん白雪の体で一番重いのは胸なんじゃないだろうか。

「ん……あいちゃん……あ！ わたししたら何を！ キンちゃん！ごめんね！」

「い、いや、いいって。大丈夫だ」

そついいながらキンジは目を背けようとするが、

「本当に大丈夫！？ 怪我とかしてない！？」

白雪は目の前に回りこみ、屈む。

丁度、屈みこんだときにキンジの目が白雪の胸元に行く。

「ちょ、わ、バカ。さっさと学校行け！ 俺は大丈夫だから！ 始業式遅れるぞ！」

「で……でも」

「ほらほら白雪。早くいきな。キンジこまってっぞ」

「う……うん……」

そついつて白雪は行こうとするが、一度振り返ってどぎまぎした様子で

「その。後でメールとか……くれると、嬉しいですっ！」

恥ずかしがってすごい速さで行ってしまった。……乙女だ。

暫く、キンジは心を落ち着けるためなのかぼーっとしていたが、腹時計で時間が危ない事を感じた俺は、キンジを呼ぶ。

「ほら、行くぞキンジ」

「ん、ああ……………って、あ！」

「ん？」

「バス……乗り遅れた」

「マジ？」

「マジ」

バスに乗り遅れたということは、今から学校に行くには自転車でいくしかない。

仕方ない。まあいいか。どうせ始業式なんてさぼっても無問題だ。モクマンタイ

俺はゆっくり行こう

「俺はゆっくりいくよ。どっかの誰かさんと違って、転校したいとも思っていないし、さ」

「嫌味か？」

「いんや、まったく。ささ、あんさんはさっさといきなはれや」

「何で京訛り!？」

「さっさに行けゅーとんのじゃ」

俺はキンジの背中を思いっきり蹴る。威力が高かったのか、ううという呻き声をあげた後、コノヤローという遠吠えをして自転車のところへかけていった。

そつえば来る時にキンジの自転車見たら爆弾がくっついてたなあ。

何だあいつ。バカなのか？ 気付かないのか？

まあ、俺に関係ないから……………とは、いかないわけね。

一応、友達だしなあ。でも、あいつ悪運強いし、美少女とムフフイベントでもあつて、ヒステリア・サヴァン・シンドロームHSSでも発動するんじゃないか？

んじゃま、とりあえず追いますか。

——ダッシュで。

善は急げ、だ。

俺がキンジを見つけたときには、キンジはセグウェイに併走されていた。

よくよく見るとそのセグウェイ、ウズイUZIのおまけつき。

こんなネタ、笑えねえな。

UZIってのは、秒間10発の9ミリパラベラム弾をぶっ放す、サブマシンガンイスラエルIMI社の傑作短機関銃だ。

どうやら、セグウェイから止まると爆発すると脅されているようだ。

何で聞こえるかって？ 俺の聴力はやばいからな。すごいやばい。

ふとキンジの走っている前を見ると、ピンクの髪のツインテ少女が居るのが見えた。

神崎・H・アリア。確か、ヨーロッパの方の生まれだったか。担任の教師がなんか呟いてたはずだ。

そいえば、今の今まで忘れてたけど、このやり口『武偵殺し』か。巷で騒がれてる、なんたらジャックで武偵を殺すっつーあくどいやつ。

武偵殺し……武偵殺し……あれ？ 何だっけか。この間『武偵殺し』は捕まったって聞いたな。

確か名前は……神崎かなえ。刑期は800年ちよいだっけか。ふっふーん、なるほど。

ん……？ H……ね、ヨーロッパの方の生まれで『H』………
なんだ、彼の子孫か。

つとと、どうやら考え事をしているうちに二人を見失ってしまった。物故した自転車を見る限りじゃ、生きてるな。

セグウェイの残骸は無しっつーことは、追っていったか。

たぶん……こっちだな。

俺は体育館倉庫に向けて歩き出した。勘で。

7期のセグウェイに囲まれるキンジ。
あいつ……な……ってやがるな。

キンジはUZIの火砲を避けながら、自分のベレッタから7発の弾丸を発射する。

結果は全て命中。な……ったキンジでこそ出来る芸当であろう。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム

HSS

キンジ曰く、『ヒステリアモード』。遠山の家で代々遺伝するものであり、簡単に言えばこの特性を持つ人間は、性的に興奮すると自身の身体能力、思考能力が上昇し、スーパーモード（明鏡止水の金色の奴ではない）になれるのだ。

更に、この状態になると男の本能として女を守りたくなるそう。それだけならまだいい。もう一つ、女子に対して『キザ』な態度になってしまうことだそう。詳しい事はまあ、この再どうでもいいだろう。

前に、俺がぶつかって、本当に本当の偶然で、ほんつとうのぐ・う・ぜ・んで、何故かキンジが俺を押し倒すような形になってしまったことがあった。それだけなら、すぐに立ち上がってしまえばいい。だ・け・ど！

そのときに、どーしてか、キンジはヒステリアモードになりやがったのだ。

俺は男だぞ！？ オイオイよしてくれよ。男に発情とかマジないわ。それから一週間ほど口を聞かなかった。うん、別にしょうがないよね？

そこで俺は気付く。キンジは気付いていないが、木の影に3台ほどのセグウェイがまだいた。

キンジは自分で粉碎したセグウェイの確認をしたあとアリアに近寄ろうとする。

ヒステリアモードになっているにも関わらず、気付かない。偏に、油断していたからであろう。

キンジが後ろを向いた瞬間、木の陰から3台のセグウェイが躍り出る。

「後ろ！！」

アリアが叫ぶ。

「な——っ！？」

キンジは避ける事は出来ないと即座に理解し、自分の『死』を覚悟する。

セグウェイは無情にもUZIから秒間10発の9ミリ弾を発射した。

キンジとアリアは反射的に目を閉じる。

ダダダダダダダダ！！！！！！

「——っ！」

しかし、何時まで立っても銃弾は襲ってこない。二人は恐る恐る目を開けた。

「何……………これ……………」

アリアは冷や汗を垂らしながら、目の前の状況を読み取る。
銃弾でUZIごとバラバラになった3台のセグウェイ。
それだけならまだ分かる。

しかし、

—— UZIから発射されたはずの100発弱の銃弾が、他の銃弾によって全て打ち落とされ、転がっていた。

「ありえない……………貴方がやったの？」

「い、いや、俺はやってない。……………一体誰が……………」

「こんなことが出来るのはSランク——」

「いや……………流石にレキでもこんなことは出来ないだろう。こんな芸当、人間業じゃない」

「じゃあ誰がやったっていうのよ！」

「俺が聞きたいさ。まあ、今はこんなところでこんなやりとりをしていても意味はない。俺は行くよ」

「あ、あんた忘れたんじゃないでしょうね」

「……………何がだい？」

キンジはまるで分からないといったように首を傾げる。

「強狼！ セクハラ！ 変態！」

アリアは天高く響く大きな声で叫んだ。

「ちょ、こんなところでそんなことを大声で中学生が言うもんじゃ

ない！」

「私は中学生じゃない！！」

「ご、ごめん。インターンではいつてきた小学生だったんだね。謝るよ」

「私は高・2・だー！！！」

結局この言い争いはアリアが発砲し戦いになったが、ヒステリアモード発動済みのキンジはなんの苦もなく逃げ延びたような。

「ふう……………」

俺は、先ほどキンジの自転車が大破した近くにあつた女子寮の屋上で一息つく。

俺の手には化け物銃、メタルイーター鋼鉄破りがある。

鋼鉄破りとは、湾岸戦争では2000メートル先の戦車を爆破した伝説を持つ対戦車ライフル、『バレットM82A1』に無理矢理連射機能を追加した試作モデルのことだ。その全長は184センチ、銃弾には徹甲弾を使用。

威力が強すぎて、安物のヘルメットであれば発射時の反動で粉碎してしまう程。

そして、あまりに反動が大きいので大人でも扱うのは難しい。

それを俺がむりやりフルオートにして使っている。たぶん常人が使えば三秒で（物理的に）廃人だろう。

「やっぱり貴方」

「……レキ」

俺の後ろに音もなく現れたのは、狙撃科のSランク武偵レキ。苗字はないらしい。

髪型は肩よりちょっと上辺りのショートで、首にはヘッドフォンを引っ掛けている。俺と会うとき以外はいつもつけている。何でも、風の音を聞いているらしい。

肩には愛銃の改造型ドラグノフ。狙撃科のとおり、ライフル銃だ。

そして、

——俺の、彼女だ。

「よくわかったね」

「貴方の撃つ音は分かる。分かりやすい」

「こいつが？」

そういいながら、俺は鋼鉄破りを指す。

「それもある。けど——」

「けど？」

「好きだから、わかる」

少し頬を赤らめながらレキが言う。

周囲からは表情を動かさない故に感情がないと言われているが、それは単純に、その人物に対してレキが心を許していないだけだ。

だから、俺の前だと感情豊かで可愛い。二人っきりの時だけだ。超可愛い。お持ち帰りしたい。

「ふっふっふ、レキ」

「何？」

「苗字、欲しくない？」

「え……—っ？ …………… / / / /」

この言葉の意味が分かったのか、レキは顔を真っ赤にする。

「冗談だよ、冗談」

「…………… バカ / / /」

やばいやばいやばいやばい。超ベリーウルティメットキュートス
ウィートハニー可愛い。

なんだこれは。なんだこのシチュは。なんだこのシチュはああ
あ……

「と、それはおいておいて。いつもどおり、今見た事聞いたこと、
口外禁止」

「わかってる」

「よしよし。そんなレキちゃんにはこのアメちゃんを上げよう」

「…………… ありがとう」

飴を貰ったレキは包みを綺麗に開けてパクツと口に入れる。
うん、やっぱり何をしてても可愛いね。

飴をなめながらレキは思い出したように口を開く。

「何で貴方は本当の力を——」

俺はレキが言葉を言い切る前に、口の前で人指し指をだす。

「……………」

「貴方じゃない。秋穂っていつていつただろ？」

「……うん、ごめん。秋穂」

「それでよし。で、もう一つ。本当の力とかどうかじゃなくて、俺はEランクだ。変わりもしない、変えもしない。俺の武偵としてのランクは最低、キンジとならば『探偵科』のEランク、蔵義秋穂くろぎ あいおだ」

「………分かった。秋穂がそう言うなら」

「俺はレキのそういうところ、好きだよ」

「そ、そんなこと／＼／＼」

「そういうところも、な」

「……バカ／＼／」

ハイ、本日二回目のバカ頂きましたーッ！可愛いです！超可愛いです！

それにしても何で飴なめてるのに普通に喋れるんだ………
例の喋り方をしてくれるともっといいのに。今度やってもらおう。

「いや」

「こらこら、心を読まない。そしてなんでやってくれないのさ」
「なんとなく」

「そうかそうか、そうなのか。レキちゃんは可愛いなあ。うん可愛い。そしてそんなレキちゃんは今撫でてあげないよ」

「それは……いや／＼／」

「ふむふむ。それならどうしたいんだい？」

「今度……／＼／」

レキはまた頬を赤らめて言う。ちよつとまで、幸せすぎる。死んでもいいか。

「と、またまたそれは置いておいて。つと、もうこんな時間か。始業式は終わったな。じゃな、レキ。また」
「うん、また」

それだけ言っただけ俺は教室へ向かって駆け出した。
俺たち二人の間に、必要以上の言葉は要らないのだ。

俺の名前は蔵義くらぎ 秋穂あきほ。『探偵科』の"E"ランク武偵だ。
髪型はポニーテイル。髪色はスカイブルー。目は茶みがかった黒。
声は何故か声変わりせず女声。
身長は150弱。体重は30何キロ。スリーサイズは秘密。
世間一般で男の娘と言う。だが、俺はこの外見があまり好きになれない。

だけど、この外見でよかったと思う時があった。

それは、レキに、出会えたこと。

そしてもう一度言うが、武偵としてのランクは最低の"E"だ。
——— まあ、ただの"E"じゃあ、ないんだ
けどな。

第一弾（後書き）

秋穂の由来は、私が自分の名前を打つときに間違えて『あおい』を『あいお』で変換してしまったときにたまたま見つけたものですw
蔵義はなんとなくです。てがかってにやってみました。

次回の更新は未定。全部だけどね！w

では！

第二弾（前書き）

今回は縦書きPDF推奨で御座います。

あ、早速感想くれた方、お気に入り登録してくれた方、それに伴ってお気に入りユーザ登録してくれた方、ありがとうございます。

次回の更新は、他の二作の更新をしてからとなりますので、遅くなります。

ご了承ください。

また、今話ではオリジナル設定が若干？出てきます。特に学食とか。あと、文中に男子トイレの場所を限りなくさり気なく示唆する表現がありますが、それは私の学校での配置ですw

では、どうぞ。

追記：お気に入り登録してくれてる人、文章とかのポイント評価もしてくれちゃってもいいのよ？………すいません、調子乗りました。自害します。

第二弾

第二弾

『おばちゃんの気まぐれ学食EX』

「おう、キンジ。どうした浮かない顔してよ」

俺は教室で陰鬱な表情で思考しているキンジに話しかける。
どうやら、クラス分けはキンジと同じクラスだったようだ。

まあ、分……き……つ……て……いた……事……な……ん……だ……け……ど……な……。

よほど深刻な内容の思考だったのか、キンジはげっそりとしたま
ま顔を上げる。

「ん……秋穂か。それがな、朝にいろいろあつてだな……」

「ふんふん。Sランク天才少女武偵にでも追いかけられたか？」

「は——！？」

凶星を突かれて驚いたのか、キンジは自分の席から落ちそうにな
る。

「な、なんで知ってるんだよ！」

「さあて、俺は「かま」をかけたただけだけど？ まさか、ヒステリ
アモードにでもなっちゃたかな？」

それにしても一応キンジ『探偵科』だろ。そんなに動揺してどう

すんだ。

「うつ……そ、そんなわけないだろ！」

こんな言い方じゃあ誰でもわかつちまう。

「はいはい。そーですか。それじゃ、そういうことにしておこう」

いや、実際知ってるけどね。見てたし。

そんなことを考えながらも、俺は自分の席に戻っていく。

「あ、ちよつとま——」

「ほらほら、もう先生きたぞ」

「つ……………」

「うふふ。じゃあまずは去年の三学期に転校してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよ！」

担任が喜々とした表情でアホっぽい前置きをする。うわつ、アホの子ってこういうことか。

担任の後に続いて、件の転校生神崎・H・アリアが教室に入ってくる。

「神崎・H・アリア。先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

おいおい、アリアちゃんそりゃ無いぜ。自己紹介っちゅーのはもうちよつと詳しい事をいいますようや。

好きな食べ物、好きな人とか。え？ 俺？ 全部レキ。今なんか言おうとした奴ちよつと表でろや。鋼鉄破りぶちかますぞ。

「よ……よかつたなキンジ！ 何か知らんがお前にも春がきたみたいだぞ！ 先生！ オレ、転入生さんと席変わりますよ！ その代わり蔵義ちゃんの隣にしてください！」

このバカなことをほざいているのは、身長190センチくらいのツンツン頭、武藤剛氣。ムトウゴウキとはキンジ談である。一応、車輛科の優等生、らしい。特技は乗り物とつくものなら何でも乗りこなせるそう。でも免許は？ 聞かないでやろう。

それはともかくとして、だ。

「黙れアホ。変態かてめー」

俺は自分の席から立ち上がり、思いっきり剛氣のツンツン頭をぶっ叩く。

「ぬがつ！ でも蔵義ちゃんにやられるならイイっ！」などまとアホな事を口走りやがったのでもう一度叩く。

そしたらまた「イイッ！」などとほざいたが、このままやると俺が剛氣の頭を吹っ飛ばすまでおわらなそうだったのでやめておいた。剛氣に対するクラスの女子の目が冷めていたのが異常に恐怖を覚えさせたが。

「む、武藤君は後ろの空いた席に座ってね……」

「ちくしょー！ 先生、そりゃないぜ！」

その武藤の言葉を皮切りにクラスの女子たちが一斉に武藤へ批判の声を上げる。

「だまれ武藤！」「秋穂ちゃんに触れるなー！」「しねー！」「m9しろ！」「燃え散れ！」「はぜろ！」「人間のゴミー！」「はははっ！ 武藤がゴミのようだ！」「バ。ス！」「ぬわあああ！！

目が！目があああああ」「ユニバアアアアス！！！」「進化を超えたインフィニティ級RPG——」「マビ。ギ！」

何か後半おかしくなっただけどまあいいか。それにラスト完璧におかしいぞ、オイ。

「グスン……」

いつも元気な武藤剛気がしゅんとして指示された席に歩いていった。いや、別にかわいそうとか思わないけどね。

キンジもキンジで何かぶつぶつ言ってるけど、そっとしておこう。

と、そんな思考をしている内にアリアがキンジにベルトを渡した。確か朝の時にアリアのスカートが壊れたんだっけか。一応、俺見えたし。

それにしてもアリアは（も？）アホなのか。何故わざわざ勘違いされるようなことをするか。わざとか？ わざとなのか？ まあいや。

この事態にクラス一番のアホの子（あれ？ このクラス、アホ率たけえ）、理子がぎゃーぎゃー喚く。^{わめ}

何だこの阿呆は。それでもあいつの子孫か？ キャラ作りか？

それとも天然か？ 出来れば前者で頼みたいんだが。

無理か。後者だな、きつと。

理子の言葉に続いてクラスの連中がまた騒ぐ。今度の騒ぎは普通だった。それにしてもこのクラス異常に息合ってるな。コフ。

ずぎゅぎゅゆん！！

唐突な二回の発砲音。どうやら、アリアがご自慢の双銃から撃った様だ。

クラスが静まり返る。一応、理子も。

「れ、恋愛だなんて……くっだらない！」

その言葉に俺は若干カチンときたが、一度レキの顔を思い出し心を静める。いやあ、レキかわええ。

言っのを忘れていたが（誰にとかなうなし）、武偵高の校則では、射撃場以外の場所では『必要以上に』発砲しないこと、というものがある。つまりは、ある程度は発砲してもいいということだ。（続・キンジ談）

「全員覚えておきなさい！ 今度からそんなバカなことをいうやつには……風穴あけるわよ！」

そろそろ、かな。若干担任も戸惑っている。若干なのは此処が武偵高故だろう。日常茶飯事……だと思う。

俺の今、求めるものはこの場の平穏だ。自分がでもあるし、何よりも面倒だ。いろいろと。

俺はもう一度席を立ち、アリアのいる教卓の方まで歩いていく。

「な、なによ」

戸惑った様子でアリアが問うてくる。

「風穴開けられんのは嬢ちゃんだ。ぐだぐだいってないで、さっさと御指名の彼のところにいきな」

俺の言葉に怒りを覚えたのか、アリアは声を荒げる。

「何様のつもり！？ 本当に風穴開けるわよ！ それに、あんだだつてあたしと身長大差ないじゃない！」

うぐつ、痛いところを。……別にいいんだ。勝ってることに変わりはしないんだから。今悲しい目で俺を見たやつはあれだ。打ち首だ。俺は大人だ。クールになれ。修三しゅうぞうを思い出せ。……ダメだ。アイツは熱い。いや、暑苦しい。俺はこのお子ちゃまと違って大人だ。あああ！！ ふう。

「やれるものならどうぞ？ まあ、俺は至って構わないんだけどな。それに事実上俺の方が背は高いから問題ない」

「——っ」

「後先考えず何にでも突っかかる。まるでガキだな。精々、『H』を汚よごすなよ？」 4 ”」

俺の言葉に理子が肩をピクツと動かす。そんな動きしたらばれちまうぞ。

「あんだツ——もう、いいわ」

アリアは何かを言おうとしてやめる。ちょっと言い過ぎたかな？ まあ、子供にはこれくらいが丁度いいだろう。

こんな感じで、新学期最初のHRホームルームは終わった。

休憩時間♪

授業と授業の合間の休憩時間の間、うん、何か文面がカオスだ。

まあいいや。休憩時間中、アリアはずっと俺を睨んでた。

俺が何か悪いことしたか？ したね。デモオレワルクナイ。コードモ、ガキニガテ。キンジタシケテ。……って脳内状況まで芳しくない。

お返しににつこり笑って返してあげた。ベツニヒタイニケツカンデテナイシ。#（シャープ）ミタイナマーケットカシランシ。

ちよつと顔を紅くさせてそっぽを向かれた。いやいや、いらんからそういうの。

休憩時間の間私は、さっきあたしを怒らせた少女を睨んでいた。あたしの視線に気付いたのか、その少女はこちらを向いた。

こちらを向いたからといって、私が睨むのを止める訳じゃない。そのまま睨み続ける。

だけど、ふと顔を逸らしたかと思えば、もう一度こっちを向いて、につこり笑ってきたのだ。

満面の無垢な笑顔を。……ちよつと額に力が入っているように見えたけど。

それに対してあたしはつい顔を紅くしてしまった。ばれない様にすぐに顔を逸らしたけど……

……あの笑顔、反則よ。

昼休み♪

俺はいつもの様にまわりを囲もうとする女子を華麗に避けて武偵高校の食堂へと来ていた。

何故か昼休みになると女子たちがこぞって俺のところに来て一緒にご飯を食べようと言っただ。

正直言つて、その時の女子の目が猛禽類のそれだ。

だから危険な教室で飯を食うわけにも行かず、いつもこうやって学食の食堂まで来ている。

それでもある程度の女子は来てしまうのだが、学食のおばちゃんがちゃんと注意してくれるのでなんとかなっている。

……ありがとう、学食のおばちゃん！

と、そんなことを考えながらもいつもの様にお気に入りの学食、
『おばちゃんのみまぐれ学食EX』を食べている。

お弁当を持ってきてキンジと一緒に屋上に行ってもいいのだが、どうしてもこの『おばちゃんのかまぐれ学食EX』を食べたくなってしまうのだ。

というわけで、昼休み中の『お仕事』は無しだ。ばれたら怒られるかもしれない。ま、いいか。

そういえば、俺がこの学食を頼むと毎回おばちゃんが「女の子なのによく食べるねえ」といつてくる。正直、ぶち切れそうになるのだが、この『おばちゃん気まぐれ学食EX』が美味しいのと、おかずとかをちよつと増やしてくれるので、逆らえない。

それにこの学食、気まぐれといっている故に、二日連続カレーとか三日連続カレーとか四日連続カレーとか……って、どんだけおばちゃんカレー好きなんだよ！

確かに！ カレーは一日より寝かせた二日目からの方がおいし
 いて言うけどさあ！

でも……流石に一週間昼飯ずつとカレーだったときは撃沈した。カレー責めとか新手的攻撃かつ！　拷問か！　俺はそんなカレー大好き人間じゃねええええ！！！！

ふう。落ちて着け、俺。クールになれ。

そうだ、何でこんな思考になつたのかを思い出せ。

ピーン！

……分かったぞ！ 俺は今、二。タイプになった！

折角女子を避けるために食堂に来たのに、今日に限って何故か女子が此処こゝまでついてきたからだ。

……何で！？ 更に無言で俺の食べてる姿を見るのが怖い！ 助けて、レキイイイ！！！！

何てことを考えていると、丁度ドラグノフを肩に背負ったレキを発見！ いや、飯中にドラグノフ背負った少女見るのはシユールだわ。まあレキだし！ 可愛いし！ いいんだけどね！

この際ドラグノフ背負つてようが、アハトアハト80mm砲背負つてようが誰でもいい！ いや、80mm背負つてたら流石に無理だ。嘘言つてごめんなさい。

つと、そんなアホな事を考えている場合ではない！ マイスウィートハニーをコールしてフォローミーしてもらわなければ！

「レキー！ たしけてー！」

「……ん？ 何か私を呼ぶ声が聞こえた気がしました」

「こっちだよー！」

俺が大きく手を振るとトテトテとこちらに歩いてきた。

「蔵義さん。どうかしましたか？」

レキが普通に聞いてくる。敬語なのは周りに人がいるからだ。

……つて、分かつうよ！ 普通に分かつうよ！ 俺の状況よく見てよ！

レキは何時からそんな天然さんになつちやつたんだい！？

あのクールでスウィートなマイハヌイーは何処にいったんだい！？
でも、そんなレキも可愛いよ。

まあ、結果的にレキが近づいてきた事で何故か周りにいた女子が霧散していった。

……終わりよければ全てよしだ。深く考えない、それ大事。

「た、助かったー。ありがとう」

「いや、大丈夫」

あ、分かつたのね。理解してたわけか。まあレキだし許しちゃうけどね！ そこお！ 甘いとか言うなし。

「あのさあ、レキ」

「なに？」

小声で話しているから周りには聞こえていない。

「神崎・H・アリアって子がさ、転校してきたの知ってるだろ？」

「一応。確か三学期の終わりにロンドン武偵局から。今年のクラスは秋穂と同じクラスだったはず」

……何でそんなことまで知ってるんだろうね。レキって『探偵科』
履修してないよね？ ……………女の子には秘密が多いって言うし、
聞かないどこ。

「それが懸命」

さらっと心読まれた！？ 流石レキ、いとも簡単に俺の心を読ん
でくるッ！ そこに惚れる、可愛すぎるウッ！！
ン？ J。J。って何？

「／／／」

もう突っ込まないよ。これ以上やると俺が自制効かなくなる。ク
ールになれ！ S o I・m C O O O O O L L L ツ！！！！

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。 H A H A H A H A ！！！！」
「そう……………」

何だY○、そのかわいそうな子を見る目は！ オイドン傷ついち
やうでゴワス。

更にかわいそうな目になったのは気のせいだろう。

あれ？ これは世に言う以心伝心というやつか！ うっほほーい！
……………プラス思考って、大事だよな。

「ま、それは置いといて、だ。……………何で俺は件のアリア嬢に尾
けられてるんだろうか？」

「そういえば少し前、秋穂について私に聞いてきた」

「ほうほう。それでなんていったのさ」

「Eランク最強武偵」

……………ハ？ 葉？ 齒？ なんじゃらほい。

「はへへ、^{やめて}はひほ^{あいお}」

気付いたときにはレキのほつぺたを両側から引つ張っていた。うむ、いい弾力だ。三つ差し上げよう。

……とと、こんな事をしている場合ではない。これはまた後でやるう。

惜しみながらもレキのほつぺたから手を離す。少し引つ張る力が強すぎたのか、レキは自分のほつぺたをさすさすしている。

やばい、鼻血でそう。神は何てことを……こんな試練、辛^{から}すぎる。間違えた、辛^{つら}過ぎる。

「うう……」

「と、そんなわけで、どうしてこうしてそんな答えを出してしまったんだい、蔵義レキちゃん」

「まだ結婚なんてしてない」

お、今度は頬を紅く染めなかった。

チッ

「舌打ちはあんまりよくない」

「な、なんのことだか。……んで、どうなんだい」

「私は私の思ったことを話しただけ。それに、秋穂が自分のことをEランクだっていうから」

「それにしたってさ、Eランク最強武偵って……受け取り方的には下の下の上ってことになるでしょうよ」

「……確かに」

分かってなかったーっ！ これは盲点、嗚呼盲導犬。ってなんじやそりゃ。

「まあ、過ぎたことはいいんだ。それにしても尾いてこられんのは

正直………嫌だなあ」

「撒くの？」

「あつたり前ー」

俺は『おばちゃんの気まぐれ学食EX』を平らげ、お盆を返す。
そこから行動開始。

まず、レキと分かれる。

次に、ワザと廊下で喋っていた女子の真ん中を通過。俺が通して
といったら案の定すぐ通してくれた。

後ろで女子が「きゃー！ 秋穂ちゃんとぶつかっちゃった！ か
ーわーいーいー！」とか言っていたが、無視。

テクテクテクテク、カッカッカッカ

前が俺、後ろがアリア。

流石にここまでではしつかりとついて来るか。

ネクストフェイズへ移行。

階段を焦らず普通に昇段。アリアも一定の距離を保って尾けて来
る。

階段を上り終わり、即座に90度回転。男子トイレに。

トイレ中の男子が俺が入ったのを見てすぐに出て行ったのは気に
なったが今はスルー。

アリアは入ってこれない。だって男子トイレだもの。

トイレ奥の換気扇横にある小さな窓を開ける。その窓の大きさは
丁度俺が一人入れるくらい。こんなときに自分の体に感謝するとは思
わなかった。

その窓のレールにポケットから出した鉤爪を引っ掛け、窓からでる。

我慢できなくなったのか、俺が窓から降りる直前に男子トイレにアリアが入ってくる。

おいおいアリア。男子が誰もいなかったから良かったけど、こんなことして中で何かやられても文句言えねえぞ。

……と、いうわけで。

「ばいばい」

シユルルルルルル

「あ、待て！」

アリアは慌てて鉤爪を取り出し同じように引っ掛けようとするが、下を見たときには既に俺はいない。

だって屋上にいるんだもの。

アリアは諦めて教室に帰っていったようだ。

俺がいきなり屋上に現れ、その場はシーンとなる。

が、そうだったのもつかの間、すぐに屋上にいた女子たちが俺めがけて猛ダツシュ！

俺はひらりと身をかわし、無駄のない無駄に洗礼された無駄な動きで一瞬で見つけたキンジの元へと向かう。

「ふう、中々ハードな食後の運動だったぜ……っ……」
「ど、どうした秋穂！」

「い……いきなり走ったからさっき食った『おばちゃんのみまぐれ学食EX』が逆流しそう……あとわき腹痛い」

「死ぬな秋穂……っ……！」

「ふっ……楽しい高校生活だった……ぜ……あばよ、ダチ公……」

「兄貴イイイイイイイ……！」

「と、それは置いて」

あ、今のはこの間キンジと一緒に見たロボットアニメの台詞だ。いいアニメだった。

「キンジ、もうチャイムなるぞ。レッツら教室」

「なんだそりゃ」

「なんだろうかね」

「はっはっはっは」

なんだかんだで俺たちって仲いいのよね。

帰宅ウ！

俺こと蔵義秋穂は、一応武偵高男子寮に住んでいる。まあ、それは架空の部屋なんだけど。

本当の部屋は……まあ、今度教えてやろう。一千万くらいで。一万で単位が0・1だから、単位100か？ まあいい。

架空の部屋っていつても、一応生活してるっちゃしてる。キンジ

の部屋のお隣だ。

「ご都合主義？ 違うな、そういう風にしたんだよ。」

と、それは置いといて。

お隣の部屋でいい争いが聞こえる。この声、アリアか。
それにしても、隣が五月蠅いんじゃない。碌に寝れない。

ちょっとクレームつけにいくか。クレーマー秋穂といわれた腕を見せてやるぜ。いや、言われた事ないけど。

待ってるよー、ふっふっふ。

第三弾（前書き）

なんでこっちの更新をしたんだろうか。それは妄想（という名の構想）……って、逆だ。

構想が膨らんでいったから。そして借り物だから早く書き上げて返したいから。

……はい、すみません。いつまで立っても先の見えないドウアフォーですいません。

っと、それはおいといて。お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

今回は超、めちゃんこ（霰ちゃん的に）短いです。メモ帳7KB っておま……まあいいや。前回までで結構書いたし。三都目までで1万3千越えるなんてビックリネー！いや、本当にびっくりしてますよ？うん。

あ、あと、お気に入り登録してくれた人も、読んでくれた人も気軽にポイント入れてくれちゃっていいのよ？ページ一番下の文章評価とかっていうやつ。

……はい、強制するものでもないですし、ただ私がポイント欲しいだけですね。ごめんなさい。死にます。嘘です。

ではでは、めくるめく葵（笑）ワールドの緋弾のエリアー未知数の？E？ー、どうぞ！

そういえば皆さん気付いてくれたかな。 ” ” の表記方法変えたの。……どうでもいいですね。

眠いです、どこぞのハナタレ凍死小僧とそれに付き従う愚かなワンの名シーン並みの眠さです。だから出落ちです。自刃と自害どっちがいいのかな。ついでに言えば私は自害の方が好きです。キャーハスカシー。

……マジで死んだ方がいいかもしれないなあ。そうしたらこ

のお脳が治るかもしれないね ^ ^

第三弾

第三弾

『4月5日完了のお知らせ』

「ちわーす、ミカ。ヤデーす」

……！？

大丈夫、君が開いたページに間違いはない。

尚、この作品は緋弾のアリア―未知数の”E”―です。サザノエさんではありません。

「秋穂!？」

俺の登場シーンと台詞に驚いた様子のキンジ。俺は白雪が出て行ったのを見送った後、キンジの部屋に入った。いや、あれだよ、何かよく分からないけど人の家の裏口から訪問するときはこれ言わなきゃいけないっていうのがあったじゃん？ あれ、あの、何て言うんだ。

大宇宙の意思？

まあいいや。最近の俺の脳内状況力オスだし。

というわけで（どういいうわけかは分からない）、俺は今キンジの部屋のベランダからお邪魔している。

何でかって？ 君はコレクターに対して「何故集めるのか？」と聞くか？

クハッ、愚問だな。

まあ、特に意味はないんだけど。

俺の右手にはカメラ。カメラじゃない。

目線の先にはアリアのと思わしき服の入った洗濯籠に手を突っ込む変態^{キンジ}。

笑う俺。

笑えない変態^{キンジ}。

変態^{キンジ}の後ろのスモークガラス？うん、まああれだ。風呂場の中が見えないようになってるガラスドアね。

風呂場にはアリアがいると見て間違いなさそうだ。鼻歌も聞こえる。テンポ的にはあれだ、J。M P r oのR O C K……………いや、何で！？

一触即発！ どれか一つが動けば状況は大きく変わる。あるものにとつては好機。あるものにとつては危機。またあるものにとつては……………特に無し。強いて言うならば、おもしろいことになると思つてw k t k状態である。^{ワクテカ}

と、少し前に戻ろう。

俺はまあ、隣にクレームをつけてやろうと意気揚々と部屋を出ようとしたわけだ。そこで、だ。

『あれ…………？ ガス栓ちゃんとしめたっけ？』

と思い、一度戻る。案の定ガス栓はちゃんと閉まっていた。でもすぐに

『あれ…………？ 部屋の電気消したっけ？』

と思い、また戻る。

そんなことの繰り返しをしている間に30分ほど立ってしまった。
不覚。

今思えば結果的には良かったかもしれないけど。ククク。

そんなこんなでミ。ワハ島^{ヤシマ}作戦始動。バックで「撃鉄を起こせ！」
だとかポジトロンがどーだとか、陽電子は地球の自転でどーだとか
というのが聞こえたと思ったら、さっきまで見ていたDVDがつけっ
ぱなしだった。びっくりした。

なんでDVDがついてたかっていうと、それは聞くも涙語るも涙
な一大感動スペクタコーがあったのでまた今度とするが、まあ、簡
単に概要を説明するとだな、たまねぎが地球を救うため猫と長ネギ
と結託して悪の宇宙人未来人超能力者を倒しながらも人類絶滅計画
を始動させようとする彼らをジ。ン・ウー監督とザ。ケローニ監督
がステ。ーブン・スピルバ。グ主演の崖っぷちでゲロby二日酔い
という映画をニンニクで作るという感じだ。どうだ？ 分かったか
？ 驚くことに最後には新たな敵が現れてレデ。・ガガと水。奈々
が究極の合体を遂げ、ぽ。ぽ。んしたりするんだが、それはまた
あとの御話だ。この説明で分からなかった君は立派なBA KAだ！

……………というのは、昨日見た夢の話なんだが。

最近思つこと。

カオス万歳！

どうでもい…………よくねええええええ！！

まあ、物事はギヴアンテイク。諸行無常。なるようにしかなら
ないのさ。それこそ流れるように。その『流れ』を作るのも大事な
んだが、それはまあ今は関係のないことであろう。俺はレキを中心
として物事を作るのさ。

思っただけどさ、俺ってアホなのかな？ タブンチガウネ。

一番最初に動いたのは……アリア。

勢い良くお風呂場のドアが開け放たれる。

それに反応してキンジが弄まさぐっていた洗濯籠の中からアリアの刀を
取り出す。その刀の持ち手に『布』がついていたことに気付かずに
パシャパシャ

軽快なシャッター音と軽いフラッシュ。

……キンジ、ドンマイ！ お前のラッキースケベ、しっかりと写
真に撮らせていただいたよ。

「へ……ヘンタイ……………」

目の前の状況を整理しきれないアリアはとり合えず自身の胸を右
手でおへその下を左手で隠す。いや、これは流石に撮らんから。何
に期待してるんだい？ HAHHAHAHHA!!

状況を整理できたらしいアリアは足を振り上げる。

「~~~~~死ね!!」

この後、ヒステリアスモードになっていない普通状態のキンジが

逃げ切れるわけもなく、アリア嬢に折檻されましたとき。チャンチャン。ヨカッタネー。

俺は何だかめんどくさくなったので見守ってやる事にした。

てなわけで。

何で俺がキンジの部屋でお泊りしなければいけないってしまっただろうか。

別に自分の部屋がいいというわけではないんだが、アリアとキンジの双方がどうしてもというもんだから。

でもなーぜーか、アリア側のベッドの下なんだなあ、これが。

この男子寮は一つ一つの部屋に二段ベッドが二つある。つまり4人部屋だ。キンジは転科してきたからこのでかい部屋を一人で使っている。別に空いてるから俺の部屋にいれてもよかったんだが、キンジはどうしても嫌だといってきた。……何で？

それはいいとしても、何でだろうね。キンジはアリアから一番遠い向かい側の下段。俺はアリアの下段。

……解せぬ、とはこれのことか。良く見たら地雷とかなんとか色んな兵器が部屋中に散りばめられてる。キヤーコワイコワイ。

アリアが寝静まった気配を悟った俺はそそくさと起き上がり、キンジのところへと向かう。

罠の類は全部避けた。俺にとつちやチョー簡単。

「オイ、キンジ。起きてるだろ？」

キンジはベッドの中の布団からそもそもと起き上がる。

「……ああ」

「お前はどうしたいんだ？」

「……………何が」

ハア、キンちゃんは どうして そうか ね。 まあ いい や。

「壁に耳あり障子に目あり。お隣さんは耳も目もいいわけよ」

「……………聞いてたのか」

「どうだか。んで、本当のところ、キンジは強襲科^{アサルト}自体はどう思ってるのさ」

俺はキンジの強襲科時代のことは知らないが、それでも今の生活態度を見ていると何処か息苦しそうだ。

「嫌いだよ……………あんなところ」

「ふうん……………そうか。でもな」

「……………何だよ」

「あんまし、自分に嘘はつくなよ」

「——っ」

俺の間髪入れない言葉に動揺するキンジ。何だか不憫に思えてしまふ。

「結局はやるかやらないかを決めるのはキンジ、お前自身だ。俺がどうこう言つことじゃないし、言おうとも思わない」

「……………そう……………だな。すまん、秋穂」

「別にいいって。んじゃ、お休み」

俺はキンジの頭を一度叩く。

「いてっ」

「きつとは明日は晴れた。俺の大つつつつ嫌いな、な」

「何で分かるんだ？」

「勘だ」

「そーかい」

何でだろうな。『仕事』を抜きにしてもキンジは嫌いじゃない。
きつと何時^{いつ}までも友達だ。

そんな、気がする。まあ、気がするだけだが。

「それにしても秋穂」

「何だ？」

「……………よくあの罨^く抜けられたな」

「俺もちよーびっくり」

「棒読みなのはそつとしておこっ」

いやだつて全然カッスカスだったもん。もうちょっと質^{しつ}がいいモノを用意してくださいませんか。

「今度こそお休みだスネ。ク」

「ああ、お休み大佐」

「そしてカズは死んだんだ」

「リキ。ドは？」

「腕^{うで}が？ げた」

「あれ？ そうだっけ？」

「いや、忘れた」

「「お休み」」

明日は晴れなんて思うと憂鬱だ。寝よう。

それにしても何かラストはどういう会話だったんだ。MGS談義か？ まあいいや。

こうして『4月5日』は終わった。俺は思う、たぶんこの日世界が動き出したんだと。

………ちゅ、厨二とか言うなし！ こっちがハズい！

また次回もよろしく！ って、頭がさらにおかしくなったみたいだ。もういいや。寝よう寝よう。

明日はきっと、いい天気！

………鬱すぎる。自刃しよう。

それにしても真剣に話すのマジ疲れるわ。もうやらなくていいよね。うん。

そんな脳内混沌会議を終え、俺は深い深い眠りの中に落ちていった。

第三弾（後書き）

リ。ツドってどうなったんでしたっけ？ あれ？ 腕が？ げたの
誰だっけ？ まあいいや。お休み。眠いのです。オットノカタキヲ
トルノデス！

うほっ、いつもどおりの脳内カオス状態です。

……バイバイ！

君の心にエタ。ナルフ。ースブリザ。ド！！

随時、感想、要望、批評をお待ちしております。
評価もしてくださるとうれしいです！

第四弾（前書き）

遅れました、ゴメンネ。

活動報告のほうにも書きましたが、とりあえずアリアを一巻の内容まで終わらせる事としました。

今回は若干スランプかもしれない。うにやっ！

それにしてもレキちゃん可愛いですね。

アニメは……どうしようかなあ。ちょっと見るの迷います。でも、見れたら見ようかなあ、と。主人公ペアはとらどらコンビですからね。

感想も地道に來ていますし、お気に入りも徐々に増えていっているの嬉しい限りです。アニメ効果早くこないかなあ、とw

では、どうぞ。

第四弾

第四弾

『俺の毎朝はレキの作った朝食で始まる』っていう未来予想図？

「バカキンジ！ ほら起きる！」

目が覚めていきなりアリアの怒声。ジュピターとちゃう。

ドタバタドタバタ、ギツコンバタン。

朝っぱらから喧^{やかま}しい。思春期の男女か！ ……あ、その通りだった。まあいいや。

「朝ごはん！ 出さないよ！」

……何？ アレか？ 私の毎日の朝ごはんを作ってください的なノリか？ あれ……でも普通は逆か？ 俺の寝ている間に何があったんだ……！？ まさかムフフなイベントが………ナンテコツタ！ 撮り逃したか！

「とりあえずお前の考えているような事はなかったぞ……。うつ」

いつの間にかアリアに足蹴されていたはずのキンジが起き上がっていた。お腹を摩つているところを見ると、まだ痛みが引いていないのだからことが分かる。

それにしても俺の考えている事が違うだと！？ キンジ如きが俺

にそんなことを言っていていいと思っているのか。プンブン。

「お腹へったへったへったへったあ!!」

アリアが喚く。

一体全体、何処の商店街の八百屋のガキだ。いや、それが何だかは分からないけど。

「それだけ大声出せりや朝飯は食う必要はねえ！」

「キンジ、俺も腹がへった」

「秋穂^{おまえ}もかよ!？」

「で、材料無いの? 材料」

「無い」

「.....何で?」

「.....コンビ二弁当」

.....

この子どうにかしないと

「オイ、キンジ」

「は、はい」

俺の迫力に押されたのか、キンジは敬語になる。

俺はずずいっとキンジに歩み寄り思いつきり顔を近づけて

「今から言うモン、10分以内にかき集めてこいやア!!」

「は、はひい!!」

「よく聞いとけよ? 一回しかいわねえからな」

すう、と俺は息を溜める。

「ヤマザキダブルソフト6枚切り卵一パック牛乳一袋砂糖一袋バター一箱メープルシロップ一本グリーンリーフ二枚ミニトマト一パックコーン一缶ハム一パックプロセスチーズ一箱イタリアンドレッシング一本苺一パック！ 金はやるからさっさと行ってこい！」

サー・イエッサー
「さ、了解！！」

9分30秒後♪

チツチツチツチツ

「残り三十秒」

俺たちの今の勢いに完全に乗り遅れた（追いつけなかった？）アリアは9分間30秒ずっと黙っている。

昨日のこともあり俺に話しにくいだけかもしれないが、今の状態に畏れているのかもしれない。

まあ、今の俺にとっては些細な関係のないことだ。あちらが話したいならそれを待つ。俺から言っても何にもならん。

「残り十秒」

「お待たせえ！」

部屋の扉を勢いよく開け放ち、キンジはアメフト選手がゴールにタッチダウンするように滑り込む。

「……ふむ、よかろう」

「よ、よかったー！」

俺は袋の中を見て、全てあることを確認しキッチンに向かう。
それにしてもよく集められたな。俺のいった材料は普通のキンジ
では覚える事も、ましてや10分間以内に帰ってくることも出来な
かっただろう。

それをやってのけたのだ。そんなことを出来るのは『ヒステリア
モード』にでもならないと……………

……………

うん？ ヒステリアスモード？ どう
してかな？

アンのエ？ キンジを行かせる時に顔にぐぐいつと近づいただけ
のはずなんだけどなあ。

俺は一旦買い物袋を見るのをやめてキンジの方に行く。

「ねー、キンジくうん」

「な、何だよ秋穂。お、俺の顔に何かついてるか？」

思いつきり拳動不振のキンジ。俺はキンジにしか聞こえないくら
いの小さな声で言う。

「ねー、なあんで、今のキンジ君が俺が言ったものを全部買い揃え
てくれたんだろうねえ」

キンジの額から汗がたらたらと流れていく。もろバレである。
空気を読み取ったアリアがキンジに向けて「キンジエ……………」とい
った顔をしている。

「お、俺だって、たたたた、たまにはそれくらいできるさ」

「ふうん、キンジクンもせいちょーしたんだねえ。初めて会った頃

とはダンチガイだあ」

「は、はは。お、俺だつて成長くらいするよ」

尚も白を切ろうとするキンジ。俺はもう、キレていた。だから気付かなかつたんだらう。いつの間にか自分の目からハイライトが消えていることに。

「く……クツクツク……クハハハハ!!」

「あ……秋穂さん？ め、目の辺りが怖いですよ……？」

「キンジくんは後で、『O H A N A S H I』かな？ かな？」

「にゃあああああああああああああああ……!!」

その日、その時間にまだ起床していなかった寮生は、その叫びによつて強制的に目を覚まさせられたとかなんとか。

「ふう、ご馳走様でした」

「お、おいしかった……」

「……………」

俺たちは朝食をとり終え一息ついていた。

朝食のメニューは簡単にミニサラダとフレンチトースト。食後のデザートに苺。簡単お手軽すぐ出来る！ うん、全部同じだけどね（本当にこの材料で出来ます）

ついでに、三点リーダーを使って黙っているのはキンジ。精神状態は………精神科医に見せれば即入院出来そうな感じだ。

現に――

「俺はダメなやつなんだ……………男に欲情しちゃったんだ……………鬱だ……………死のう」

――という感じである。

そんなことは俺は気にせず一度仮の住まいに戻る。事後処理とかめんどいのでやりません。

そういえば、O H A N A S H Iを少しながら聞いていたアリアは俺が男だという事に始めて気づいたらしい。

……怒ってもいいよね？ オレワルクナイ。

別に部屋に帰ったところで何があるわけでもないんだが、そこは何となく。

そのあと、アリアがキンジに被り付いて出て行ったのを見送って俺も学校に行く事にした。面倒くさいけど。

その日の学校は特に何もなかった。いつもどおりだった。特筆する事がなかった。なんだこれ面白くない。

昨日もそうだったんだけど、女子が俺のところに押しかけてくるんだ。なんなんだいったい。自覚？ ナニソレ。

そんなわけで、俺は現在尾行中。……なんでだろーねー。どんなわけだろうね。最近自分で自分がわからなくなるんだ。

っということ、キンジを追っかけているわけですが、予想通りアリアがいるわけです。

てきとー（適当ではなく）に尾行するとアリアが気付くかもしれないので、ある程度本気で尾行中。

今の俺ならば、幽霊以下の存在感でホワイトハウスに侵入して大統領の首をとることだったやすて容易い。やったら危ないからやらないけど。S Pマジコエー、ちょーこえー。なんだあのグラサンと黒人は。

ま、それはいいとして。どうやらキンジは、クエスト依頼を受けてアリア

から逃げようとしたみたいだけど、案の定捕まってしまったようだ。不幸スキル持ちですね、わかります。

なんか、傍^{ハタ}から見るとイチャイチャしてるようにしかみえないんだ。もう帰ってもいいよね。なんとでもなるよね。あんなの見て無くていいよね。答えは聞いてない。帰る。

そんなわけで、帰り際に私服のレキを見かけたのでイチャイチャすることにした。

「っていったとしたら、主語はどこなんだろうか」

「……………私に聞かないで欲しい」

何だかレキに呆れられてしまった。いつも通りだ。

「俺としては主語は「レキ」だと思うんだが」

「……………そう」

「レキちゃんテンションひくいねー。どしたのさ」

「何でもない」

「ふー……ん」

何か裏がありそうだなー、と。まあレキが何でもないっていうならそれでいいだろう。もし何かあるんだったらその時はその時だけどね。そして私服のレキたちよーかわええ。俺も私服だけど。どんなのかった？ 教えねえよ。俺のもレキのも。

と、そんなことを考えながら歩いていたらアホっぽい男の二人組みがこちらに向かって歩いてきた。

ここは青海だから武偵高の学生以外もいる。さらに億ションが立ち並ぶお洒落なところだから、金持ちのボンボンの子とかだろうという予想は容易にたてることが出来た。

片方はデブー、もう片方は……なんだか臭そうな長身の男。実にキモイ。

そのうちの臭そうな（↑ここ重要）長身の男のほうの話しかけてきた。

「ねえねえ君たち可愛いね。俺たちと遊ばない？」

「そ、そうなんだな。僕達と遊ぶんだな」

な、なんだな……一昔前の発想だなオイ。それにしても、典型的な軟派か。キモイな。

そして何か臭そうだな。臭いそうだな。キモイな。キモイね。

「オイッ！ 聞いているのか！ ちょっと可愛いからって調子に乗りやがって」

「そ、その通りなんだな！ そんな子達はお仕置きなんだな！」

安心の超展開だ。思考回路が腐ってるな。

その声の後、物陰から黒服のやつらが10人ほど出てくる。やっぱ腐った金持ちのぼんぼんだったか。

ガチャガチャガチャ

何かを組み立てる音。

……… あんるえ？ 何でレキちゃんはやっちゃとドラグノフの準備始めちゃってるんですかねえ？

「すぐ終わらせる」

殺る気満々ですか。そーですか。だがしかし、ここは彼氏としての威厳を示さねば。

「まあまあ待ちなさいな。此処は俺が片付けよう」

「でも……」

「好きな女に守られちゃ男の名折れた」

「……分かった」

「うん、それじゃちゃっちゃと行きますか。いや、逝かせますか」

「何をごちゃごちゃと言ってるんだ！ 行け！ あの二人を捕まえる！」

ザッ

よく訓練されたのだろう。一糸乱れぬ動き。驚くほどに教科書どおりな捕縛用の動き。

だが、それは教科書通りであるが故に、意味を成さない。

或いは、気転を利かせたトリッキーな動きをしたとしても、意味は成さなかったかもしれない。

それは、相手が蔵義秋穂その人だった故に。

「なあ、黒服さんよ」

『……………』

「雇い主があれじゃあ、報われねえな」

『……………』

何人かが眉を動かすも、無言。仕事人だねえ。

「「行けー！」」

まったく空気の読めない二人組みが叫ぶ。それと同時に訓練された動きで俺に飛び掛る黒服。

見事な連携だろう。まあ、結局意味も何も関係ないんだが。

俺は懷から一丁の拳銃を出す。

その銃は異様だった。その銃身は俺の腕ほどもあり、銃口もそれに応じて大きい。常人が扱えば腕が吹き飛ぶほどの銃弾を扱う特殊銃。その、『常人』の定義の中には大人の男性も含まれる。

J A K K A L、それがこの銃の名前だ。

黒服はこの銃の異様さに一瞬戸惑ったものの、動じず襲い掛かる。

パン！

銃声は一発。ただ一回の銃声。

ただ一回だけの発砲で、10人の黒服がその場に倒れ伏す。そう、俺は一度の発砲音で10回撃った。厳密に言えば、普通では聞き取れない速度で撃った、といったほうが正しいが。

俺は二人組みに近づく。

「や、やめてくれ！俺たちが悪かった！この通りだ！許してくれ！」

「ゆ、許して欲しいんだな！」

俺は情け容赦なく、一言、言い放った。

「ヤダ」

パン！

二人が倒れ伏す。

「またつまらぬ者を――」

「空砲」

「……………だつてしょうがないじゃん！ 校則やぶつたらイロイロ面倒でしょうよ！」

「はいはい」

なんだかんだいって、俺の銃には銃弾は入っていなかった。つまり、倒して10余名は空砲で気絶したのだ。

だが、たとえ空砲でも弾丸に撃鉄を下ろし、発射するための衝撃は伝わる。

結局のところ、超高威力の空気砲なのだ。

「……………もういいや……。帰ろ」

「事後処理は？」

「知らん」

「後でどうなつてもしらない」

「そういつて、結局何かあったら手伝ってくれるところが可愛いんだよね」

「……………手伝おうかと思ったけどやめた」

「ノーン！ 嘘嘘！ ヘルプミー！」

「……………」

レキはツーンという効果音を出しながらツカツカと先に行ってしまった。困った、レキを怒らせてしまった。でも、そんなレキも可愛いなあ。

そんな感じで、今日の一日は終わってしまった。

「……………バカ」

そんなレキの呟きは、秋穂に届く事はなかった。それが幸か、はたまた不幸なのは、レキにしか分からない。

唯一ただひとつ言えるのは、秋穂が——鈍感だという事である。

第四弾（後書き）

余談ですが、私の性別はなんでしょう。

学校で初授業の人が名前確認したんですが、私の時に「（私の本名）さん？ ……あれ？ くん？ えっと……」って云われました。二回ほど。

中性的でゴメンネー！髪の長さがロン毛の男とショートの女の丁度中間の絶妙な長さでゴメンネー！

なんだか、自分で自分が分かりません。私は一体何者なんでしょう。うか。謎は深まるばかりです。

では、次回もお楽しみに、です♪

随時、感想、要望、批評をお待ちしております。
評価もしてくださるとうれしいです！

第五弾（前書き）

今回は若干スランプ気味ですかね。

まあ、かるく読んでくださると嬉しいですね。

『ヴィーナス&プレイブス』の歌を聞きながら書いていました。とっても和みました。いい曲です。

このゲームを知ってる人はあれ？ッて思う台詞が一つあります。気付くかな？

では、どうぞ。

第五弾

第五弾

『盗聴するほど耳がいい』

俺は現在、隣の部屋の会話を盗聴中である。

「——こないだ、2人逃がしたわ。生まれて初めてね」

「——へえ。凄いヤツもいたもんだな。誰を取り逃がした？」

ほほう、誰を逃がしたんだろうか。いやな予感がしてならないんだが、気のせいだろう。

「——あんと、アイツよ！」

ぶっ！

俺は飲んでいたコーヒー（誤字にあらず）を吹き出してしまった。隣の部屋からも同じ音がしたところを見ると、キンジも吹き出したであろうことがわかる。

それにしても、何で俺がカウントされにやなんのじゃ。犯罪者じゃないぞ。どっちかっていうと、ストーキング罪としてアリアが罪に問われてもおかしくないんだけだなあ。

キンジも同じことを思ったようで、隣の部屋でもその質問をしてくれた。キンジはまあわかったけど……俺は？

そういえば……なんでキンジと思考が同じなんだ！ キモいわ！

「——ん？ アイツって？」

「——アイツはアイツよ！ 隣の部屋の！ 名前が思い出せない……」

「——ああ、秋穂か。アイツに何かされたのか？」

「——い、いろいろよ！」

「……そりゃないぜ、アリア。漠然としすぎてるぜ。困ったもんだぜ。」

そのあと、軽く聞き流しながらぼーっとしていると、また俺の話題になったようなので聴いてみることにした。

「——秋穂がねえ……」

「——何よ。あんた、アイツについて何か知ってるの？ 知ってるなら教えなさい！」

「——教えるって云つてもなあ。アイツは転入してからずっと普通のEランク武偵だったぞ」

「——Eねえ……。あたしも気になっていろいろ聞いて回ったんだけど、分かったのは名前とランクと見た目の特異さ。あと、アイツとよくはなすって言う噂を聞いた、Sランクの『狙撃科^{スナイプ}』のヤツに聞いたら、『Eランク最強武偵』っていつてたわ」

「レエキィ……恥ずかしい広め方を……。……」

俺はいつの間にか、手に持っていたコーフィーカップの取っ手を？ぎ取ってしまった。お気に入りだったのに……しょぼん。

「——『Eランク……最強武偵』？」

「——そ。あたしもよく分からないけど、そう言ってたわ。でも……」

「——でも？」

「——あの身のこなし、Eレベルじゃないわ。最低でもBくら

はいくんじゃないかしら」

ふう、良かった。B程度だと思っていてくれたようだ。

「——それにしても不可解なことがあるのよ」

「——不可解な………こと？」

「——追いかけてたら、ある場所でききなり消えたのよ」

「——ある場所ってなんだ？」

「——そ、そこはどうでもいいわ！ 関係ない話に逸らさないで！」

「——なんでえ！？」

まあ男子トイレだとはいえせんわな。言ったらウワァだし。そしてキンジドンマイ！

「——それはともかくとして、何なのかしら………一瞬で、それこそ陽炎のように」

「——待てよ？ それって最近のことか？」

「——最近も何も、二、三日前よ」

「——昼休みか？」

「——……なんでそんな事聞くのよ。まあいいわ。確かに、昼休みだったわね」

「——それなら秋穂、いきなり屋上に現れたぞ」

「——……え？ 屋上？ あたしが追ったときは男子トイレから飛び降りたはず………」

「——は？ 男子トイレ？」

自爆乙。藪蛇乙。何でそういうところは遺伝しなかったかが不思議だ。彼が悲惨だ………

「——お前、男子トイレに入ったのか……？　それは常識外れにも程が——」

「——う、うるさい！　こっちもいろいろあったの！　それ以上何か言ったら風穴開けるわよ！」

「——やめろよ！　……でも、確におかしいな。なんでトイレから降りて屋上に来れるんだ？」

「——だから今それを考えてるんじゃない！　バカキンジ！」

「——バカってお前なあ……。それに、どうしても知りたければいいじゃねえか。隣だし。案外、今の会話もきいてるかもしれないしな」

むっ、普通状態のキンジにしちゃあ中々勘が鋭いじゃねえか。今發揮してもらいたいものじゃないけど。

「——そんなわけないわよ。この部屋に盗聴機とかがありそうな場所を全部洗ったけど、何もなかったわ」

当たり前だ。何故なら盗聴機など使わずとも自分の耳で聞こえるからな。

「——それならそれでいいけどな。で、何で直接聞かないんだ？」

「——そ、それは……。なんていうか……。苦手なのよ」

「——アリアが秋穂を苦手、ねえ……。まあ、分からないでもないけどな」

なんだろう。まあアリア自身に特に興味があるわけじゃないし、いいか。

「——で、話はちょっと変わるけど、何であんとアイツは仲

「がいいわけ？」

「——そういうことは聞かなかったのか？」

「——誰も知らなかったの。皆一様に、いつのまにか一緒にいるっていったわ」

「——いつの間にか……そうだなあ。秋穂が転校してきてちょっと経ってからだったか、あっちから会いにきたな。まあ、それからはうだうだと一緒にいるうちに今になった、見たいな感じだ」

「——ふうん。なんだか適当ね」

「——今も適当だな」

「何でか適当なんだよなあ。しっかりとした関係じゃないっていうわけじゃないけど、だらだらとくっちゃべってるだけだな。まあいいや。」

「このあとなんだかいろいろあって、キンジは強襲科で起こった事件を一回だけ解決する事になったらしい。その時点でいろいろとフラグがビンビンに立ってるような気がしたが、気にしないでおくことしよう。」

— A f t e r D a y —

強襲科。通称『明日無き学科』。

この学科においての卒業時生存率は97 / 1 %。簡単に言えば、100人の在籍生徒のうちで3人は任務中、ないしは訓練中に死亡している事と同義である。

この学科が武偵としての危険度を現せる最たるものであろう。故に、これこそ武偵高、引いては武偵の暗部なのだ。

……なんていうしょうもない説明をしている俺こと、蔵義秋穂は強襲科に、

——向かうキンジを見送っています。これぞ叙述ト

リック。別に俺が強襲科に行くわけではない。あそこに行くと、あまりいいことがない。

と、いうわけで見送った俺は現在ゲーセンにいる。別に取るうと思えばいつでも単位は取れる。いや、もっと言うならば俺は単位なぞいらぬ。

とまあ、どうでもいいことを考えている俺と対峙しているはUFOキャッチャー。無論、UFOキャッチャーではない。U、F、O、ユーフォーだ。………知ってるか。知らなかったら逆にイタイ子だ。

このUFOキャッチャーに入っているのは、ライオンっぽい何かのぬいぐるみっぽいやつ。不確定だなあオイ。

俺……これ取れたらレキにプレゼントするんだ………

なんて、どうでもいい散財フラグを立てようともしてみるが、基本的に俺はミスらない。百発百中だ。………百円一中？………どうでもいいな。

あれだ、奇跡的に一個に残り99個のタグとか紐とかが引つかかっているいいんだ！………と、ありえない予想を立ててみたりしたが、これがいけなかった。

何か………30個くらい一気に釣れた。これなんて松方。樹？

………あれは鰯か。^{メグロ}

99個には及ばなかったにしろ、とんでもない量である。

チラッとでてきた店員がこの状態を見たたん、青い顔をして何処かにいってしまった。オレ、ワルクナイ。

どうしよ………これ。

俺がこんなに釣ってしまったにしろ、機械の中にはまだ結構ある。20個くらい。

それなら――

よし、配るか！

そうと決まったら即行動。それが俺さ！

……なんて思っていた時期が俺にもありました。

よくよく考えたら何かもったいない気がするので、レキにあげるついでに飾りっ気のないレキの部屋に置いとくか。

……ぬいぐるみに囲まれて生活してるレキ萌え……

とと、いけないいけない。いつの間にか鼻血が出てしまっていたようだ。

早速レキのところにいくか。

店員さんにデカイ袋を貰い、俺はレキのところへと行く事とした。

秋穂がいった後のキンジたちの会話。

「何これ？」

「ああ、これはUFOキャッチャーだろ」

「UFOキャッチ？ 何か子供っぽい名前。……それにしても、こんなに大きい箱に入るものなのに数が少ないのね」

「……え？ あれ？ 何でこんなに少ないんだ？ いつもはもっとあるのになあ」

蔵義秋穂という人間は、知らず知らずのうちに他人に影響を及ぼしているのかもしれない。

「——と、いうわけで、はいレキ」
「……………多い」

若干顔が強張っているレキ。それもこれもこのレオポン（ぬいぐるみの名前らしい）の所為だ。俺が大量のレオポンの入った袋を渡したらこんな空気になったんだ。メーカーと製作者消すぞコラ。しないけどねー！ たぶん。

「俺は部屋中のレオポンに囲まれているレキが見たいんだ！」
「欲望が爆発してる」

簡潔かつ的を射たツツコミだった。

「ナイスツツコミ！」
「その評価をもらいたいわけじゃない」
「ハッハッハ！ レキは笑いの申し子か！」
「そろそろテンションを戻して欲しいな」

いやわかってたよ、そろそろ疲れてきたって事くらい。自分でも。

「だが断る！」
「——またね」

部屋のドアを閉めようとするレキ。俺は閉めようとしたところをなんとか抑える。

「冗談だって！ いいじゃん！ プレゼント！ レオポン可愛いじゃん！」

「可愛い……………ん」

なにぃ！？ レキはこのレオポンの魅力が分からないのか。

この、なんていうかよく分からないけどちょっとあれな外見が非常に興味をとおざけ……………って、俺実はレオポンそこまで好きじゃないんじゃないか？

「その通りだと思う。ばいばい」

「大事なものは間合い、そして引かぬ心！」

「こんなところで名シーンみたいなのをされても困るんだけど…

…」

「いいから部屋に入れるんだ！ ホっホっホ！ 貴女の質素で飾り気のないクレージールームを、アンタツチャブルでデンジャーでワンドウアーフルな部屋に改造して差し上げますわ！」

「……………分かった」

よっしゃ！ レキの部屋入場権を獲得したぞ！ そして何か三点リーダー多いぞ！

「この、一見飾り気のまったくない部屋を劇的変身。南の町から南南西の町まで、手がけた物件は片手でしか数える気もでない、ヌイグルミ置きの人、その道のプルオ、『匠』蔵義秋穂！」

「……………やっぱり……………帰って」

ナンダッテ！ この通り文句を知らないのか！？ 劇的押し売りジャパネットアフター秋穂を！

顧客数（下から数えて）日本一！ 世界の物件の1刹那のシェアは当会社がやってるんだぞ！ へっへーん、凄いだろ。

凄くないですかそうですかそうですしょっとも。

「迷惑な話です」

「さいですか。お気に召しませんでしたか」

何かレキが疲れ果てて外交モードになってる！？

そんなんだからついこつちも適当な喋り方になってしまったじゃないか。……いつもの事だったね。

「そんなわけで、レキ嬢のお部屋のときとーな所にレオポンを置いていきます」

「てきとーじゃだめなんじゃ……」

「ハッハ！ 案ずるな、適当ではなくてきーだから」

「……はい」

「それでは、いざ尋常に、参るッ！」

I am the bone of my LEOP

中略

OPON
works
”

S
o
a
s
I
p
r
a
y
”
u
n
l
i
m
i
t
e
d
L
E

「ちりやりやりやりやりやりやりやあああ……！」

袋の中のレオポンを掴んでは投げ掴んでは投げ千切っては投げ投げては千切り……以下略。

「ふう」

「……」

部屋中に散りばめられたレオポン。とんでもなく不思議な事にしつかりと配置が重ならず、全てが丁度いい位置に置いてある。『完全な調和』とはこのことか。

どうやら、この完璧さに呆然としていると思われるレキは無言だ。勘違いなんかじゃないぞ。

「これで目的は果たした。レキ、携帯だせ」
「……？ はい」

よく分かっているながらも俺に携帯を渡すレキ。予想通り、というべきか、部屋と同じようにストラップも何もついていない。俺は二つだけ残しておいたレオポンをポケットから取り出す。

「ありがと。んーと、よいしょ、ほりゃ、せいや！ ふんぬらば！
ギエピーー！……お、出来た出来た。ほい」

中途半端な太さの紐だったせいで中々入らなかったが、しっかりとねじ込み通し結ぶ。いい忘れていたが、レオポンは携帯ストラップだ。妙にでかいけど。

「……………うれしい」

若干頬を朱に染めて喜ぶレキ。可愛いかって？ 愚問だわjk。

「そういつてもらえろ俺も嬉しいよ。ほら、お揃いだ」

俺は先ほどレオポンを突っ込んでおいた方と逆のポケットから携帯を取り出し、レオポンをつける。

慣れたもので、こんどは何の苦もなく入った。

「それじゃ、またな」

「うん」

「あ、それと」

「……それと？」

「何か、嫌な予感がする。……レキ、明日の天気を知ってるか？」

「確か、雨だった気がする」

「……雨、か。本当なら喜んでるところなんだが……。雨……」

「何かあったの？」

「いや、なんでもない。レキも注意しとけよ」

「……分かった」

辺りを見回すと空はとうにオレンジ色を消しかかっており、すぐにも暗くなりそうな時間だった。

「また明日、レキ」

「明日は会わないかもしれない」

「会う会わないじゃないよ。俺が会いに行く。それに、運命が俺たちを近づかせる」

「秋穂は詩人……なのかな？」

「詩人……か、違うな死人しじんといってもいいかもしれない」

「……どういふこ——」

「いつか、教える」

俺は力を込めた声で言う。その様子レキは何かを読み取ったのかそれ以上は何もいってこなかった。

それがレキのいいところだな。

俺は軽く手を振ってレキの部屋を後にした。

帰り道、雨が降り始めた。最初は小雨だったが、俺が寮について自分の部屋に着くまでには本降りになっていた。

台風が来ているらしいからな。

この様子だと明日一杯も雨が降りそうだ。いやな予感が当たらないければいいんだが。

まあ、そんなことを今考えたところで何がどうなるわけでもない。俺は部屋に入るなり、さっさと風呂に入って寝ることにした。てか、寝た。

その夜俺は夢を見た。

荒野の中、対峙するは三人の男。

一人は少女のような外見。

後の二人は、まるで霧がかかったかのようにぼやけている。

ああそうか、この少女のような男は俺か。

対峙するは彼らか。

俺は、俺の記憶を見ているのか。

懐かしい。ただ、懐かしい。

100数十年前の出来事だからか。

何故か、またあいつらに会うような気がしなくもない。

夢と記憶と共に俺の夜は更けていった。

第五弾（後書き）

随時、感想、要望、批評をお待ちしております。
評価もしてくださるとうれしいです！

第六弾（前書き）

にゃーっす。ちょー眠いです。やばいですびっくりです。今回な
ろう作者になつてから最高記録の文の長さです。あー眠い。

感想返信遅れてます。明日返します。ごめんなさい。

そして、なんとなんと、レキちゃんの癖を勝手に変えました。銃
をうつときに言う『あれ』を、変えました。あんな悲しい詩をレキ
ちゃんに歌わせちゃいけないのですよ。でも、眠いから何かいてる
のかわかんなくなっちゃったんだよ。今も。

トウルトウルツトウル〜！なんだかんだでお気に入り登録数が6
0件越えてたんだYO。わーい。ついでに言えばPVとかは二万超
えてたような気がします。ワイイ。

なんだか脳内状況が、いつものことですが芳しくないので、さっ
さと本文に行きたいと思います。

そしてもう一度いいますが、感想返信できてなくてすいません。
明日、がっこーから帰ってきたら返します。たぶん絶対。

わーい、では、どうぞー。

第六弾

第六弾

『笑顔で平手』 『爆弾の伏線』 『イレギュラー異常』

レキの言ったとおり、今日は雨が降った。

音はざーなどという生易しいものではなく、絶え間なく、まるで弾丸の如く雨粒が降りしきっている。

だが、寒いという事はなく、湿気と春の微妙な暖かさで体に纏わりつくように蒸し暑い。

ふと学校を休もうかとも思ったが、嫌な予感を思い出し、やはり学校に行く事とした。

自分の部屋のドアを開けた瞬間、耳に飛び込んでくる激しい雨音。部屋の中にいたときよりも数段クリア、かつ立体的な音が軽く気分を害する。

……などと、若干詩人のようなことを口走ってみたりもするが、特に気分を害するわけでもなく普通の気分だ。雨だっていいじやまいか。

でも、今日の雨は運が悪かった。学校を休んでいればよかった。そう、思った。

なんてったって、朝っぱらから、バスジャック事件に関わる羽目になったんだから。

俺の朝は、一通のレキからのメールで始まる。とこかで聞いたよ

うな言葉だが、まあいいだろう。

レキは毎朝6時に俺のところにメールを寄こす。それがモーニングコール代わりだ。

俺は枕もとの携帯についているレオポンを手繰り寄せ携帯を掴み、受信メールを確認する。

文面は以下の通りだ。

『おはよう。早く起きないと、狙撃する』

簡潔かつ、脅迫的かつ、キュートな文面だ。ついでにいうと、最後のが一番大事だ。

俺が自慢の目で女子寮の方を見ると、しっかりとレキがドラグノフを射撃体勢で固定していることが分かる。

これが毎朝あるもんだから、こつちも起きないわけにはいかない。まあ、レキからのメールは着メロも特別なので、鳴った瞬間に跳ね起きるんだが。ちなみに着メロは『魔弾』。毎朝魔弾の射手に狙われているスリリングな気分を味わっています。某、千葉県にある東京の夢の国も顔負けなアトラクションですね。花や。きでも可。フ。キュー？ それは違うな。

と、そんなどうでもいいことを考えている暇はない。

俺は慣れた手つきでちゃっちゃと制服に着替える。……………いや、一年間武偵高の学生やってて慣れてなかったらやばいからね。

今日の朝食は、トースト一枚とスクランブルエッグに牛乳という軽いモノだ。

実際のところ、俺は1年間何も食べなくとも死ぬ事は愚か、衰弱する事もないというところでスタミナを持ってるわけで。え？ もうそれはスタミナじゃないって？ 何言ってるんだ、別に今はそこは論点ではないだろう。プンスカ。

朝食を食べ終わり、携帯を開きツイ。ターで行って来ますと呟く。

一瞬でタイムラインがいつてらっしやいで埋まりきる。それでも動作が全く遅れないのは、この携帯が俺のお手製の違法級の改造品だからだろう。水深500mの水圧を耐えうる強度。ダイアモンドやオリハルコン（存在してるかは知らないけど）を凌駕するほどの硬さに、地球引いては宇宙の何処にいても誰にでも電話をかけられる特殊構造。防水加工も完備。その他e t c e t c……。つて、これもう携帯じゃない何かになってないか？ まあいいや。

あと、俺のツ。ッターアカウントは、フォローワーがユーザ総数の7割ほどなんだそうだ。認知度すごいんだろうなあ。何でだろうか。少し顔写真公開しただけなのになあ。

と、出発前の準備を済ませた俺は一度大きな欠伸をし玄関のドアノブに手を掛ける。

ガチャガチャガチャガチャガチャ

………開かないよ。鍵は開いてる。

とりあえず、リトライしてみることに。

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガガガガガ

………何でさ。

鍵はちゃんと開けた。キーチェーンも取った、自動ロックも内側からなら関係ない。

もう一回言うけど、

………何でさ？

ええい、リトリヤイっ！

ガチャガチャガチャガチャガチャガキガキガガガゴキンゴリ
ゴリユッ

……………ピシッ。

いい加減頭にきた俺は、懷から小銃を取りだす。

パンパン！！

拳銃の小気味いい発砲音が室内に木霊^{コタマ}する。

俺は意を決してドアノブに手を掛け、引く。

ガチャン

ふう…………… やつと開いた。それにしても、どうなってるんだ？
俺はドアの外側から鍵穴を覗く。

「……………あ」

—— 鍵穴の中には、キーがねじ込まれていたっ！

……………… なんて！？ 新手な攻め方だな！ 食えってこと！？
くっそー、犯人を見つけたらそいつの家の鍵穴に鉛を溶かして流し込んで固めてやる！ あれ？ 俺のほうが鬼じゃね？ …… そんなことないか。

……………… 実のところ、犯人は分かっているんだ。

こんな事をするのは、……………… まあ、後で分かるだろう。言ったらネタバレになっちゃうしね。皆どんな展開になるかわくわくしたいでしょ？ って、俺は誰に話してるんだろうか。大宇宙の意思なんてものと関わりを持った覚えはないんだけど。オーイ！ 誰か黄色い救急車呼んでくれー！

…………… 巫山戯過ぎたね。

俺は時間の確認の為に携帯を開く。

携帯の無機質な数字だけの電子時計は、既に7時57分を指していた。

「……………やっちまったな」

これもどれも、どっかの誰かさんが俺の部屋の鍵穴にキーを捻じ込んでくれたお陰だぜ。ふー、お礼をしてやりたいところだが、ちよースーパー寛容な俺は許しておいてやろう、今は。

とりあえず、7時58分のバスに乗り遅れた事は明白だ。よし、遅刻しよう。そーしよー。さん、はい

『そーしよー！』

うわっ、びつくりした。どっかから俺のフリへの返事が来たぞ。こりゃタモさんもびつくりだ。あ、タモさんで思い出したんだけど、あのグラサンってどうなってんだろ。あれ、前見えてるのかな。ちよーこえー、アメリカの大統領付きのSP並みにこええよ。

『外す事のない恋の魔弾を』

と、そんなことを考えていると携帯に着信が。着メロが魔弾だということとは、レキだろう。俺は電話に出る。

「ぐっどもーにん、まいはにーレキちゅん。どう？ 元気？ 俺は朝からローテンション爆発さッ！」

『ローテンションは爆発しないと思うけど……………』

「ローションだなんて、レキちゃん何を考えてるんだい！ プンプン」

『……………』

「嘘だから！ どこの竜宮さんじゃなくて！ 朝はテンションがオカシのー！」

『———神崎さんから依頼が来ました』

レキが外交モードになったということは、事態は深刻なようだ。俺も真剣になろう。真剣と書いてマジ。

「内容は？」

『いつも秋穂が乗る、7時58分発のバスが『武偵殺し』にジャックされました』

「……………マジすか。ケーキのお陰で助かった。ありがとっつ、潰れてしまった苺ショート！ お前のことは忘れないよ！ 明日までには！」

「で、レキは後方援護か」

『はい。出来れば、秋穂に来て欲しいのですが』

「俺が？ 何で」

『非常事態が起こったときの為です。秋穂がいれば何とかなると思いました』

「……………わあつた。場所は女子寮の屋上か？」

『……………見えてるの？』

「当たり前だ。レキが何処にしようと俺は見つけてみせる」

『……………バカっ』

プツンと、通話を終了させる。……………かわいいなあ、レキ。

そいじゃ、行くとしますかね。愛すべき人の場所へ。

俺がついたときには、場にはキンジ、アリア、レキの三人が揃っていた。因みに、俺はC装備など無し。面倒だし。

ふむ、これがキンジの約束した一回だけの任務になるのか。……………まあ、この事件を解決しただけで終わるとは思ってないんだけどな。間の悪い事に、キンジとアリアが口喧嘩をしているときに入ってきてしまったようだ。運が良かったのは、二人とも言い争いに夢中

でこちらに気付いていない事か。

俺は階段の廂ひさしに体育座りをしていたレキに話しかける。俺が隣に座ると、ヘッドフォンを外してこちらを向く。

「ういっす」

「……ういっす」

おお！ 珍しくレキが乗ってくれた。うれしいものだ。最初に会ったときならばこんな反応はしなかっただろう。

「その、何だ。面倒くさいな」

「何がですか？」

「あれだよ、あれ」

俺は顎で例の二人のほうを指す。

「放って置けばいいのでは？」

「目の前でやられるとうざいかな、ってね」

「……………」

レキは無言になった。……たぶん、俺がやることが分かっているからだろう。流石レキだ。

俺は立ち上がり、キンジとアリアの方に歩いていく。ワザと、大きな足音を立てて。

足音で気付いたのか、同時にこちらを向く二人。

俺は二人の眼前で、軽い調子で言った。

「アローアロー。うるせーぞ、お前ら。はっはっはっはっは」
パンパン！！

銃声とは違う種類の乾いた音。

そう、俺は笑いながら——二人の頬をうった。平手で。

俺の行動に呆然と立ち尽くす二人。俺のやったことがまったく理解できていないのだろう。笑いながら頬をブツ叩いて来る。場合によつてはトラウマもんだ。まあ、あいつらにはよくやったもんだが、やっと思考が頭に辿り着いたのか、アリアが最初に声をあげる。

……おそつ、恐竜かよ。

「な、何すんのよ！」

アリアの顔は、怒りに満ちていた。アリアにとっては、キンジと違い俺はただのちよつとおかしなEランク武偵。まるで目下のやつにこんな行動をされれば、怒るのは当然だろう。

「何すんだ秋穂！」

キンジもやつと声を出す。……いや、二人とも遅いつて。戦場だったら死んでいますよ、ほっほっほ。

と、二人の発言は無視し、俺は俺のいいたいことだけ言う。自己中とか言うなし！

「オイリーダー。リーダーならメンバーに状況説明をするのは当たり前だ。いっくら今のキンジがクソみたいに頭の回転が悪くても、もう少しきちんと説明をしてやれ。キンジの言う通り、武偵の任務と死は紙一重だ。状況を知る必要のないメンバーなどいない。そして、武偵憲章1条の意味を履き間違えるな。『仲間を信じ、仲間を助けよ』だったか？ 信じるためには理由も要る。信じる故に助ける。そんな目的も理由も状況も把握できないような状態じゃ、そんなもんはただの綺麗事だ」

「——ッ！」

「そして、その通りだみたいな顔をしてるキンジ！ 手前も手前だ。今回はある程度単純な事件だ。物事を考えずに、思ったことをすぐ口に出す癖を治せ。まずは考えろ！ 分かったかバカどもが！」

「……………すまん」

「わかりやあい。そちのガキンチョが何を考えてるかは知らんが、大局を見あまる事だけは避ける。……………丁度、足もきたようだしな」

バリバリバリバリという、耳にあまりよくなさそうな音が空からこちらに向かって降りてくる。武偵高のヘリだ。

「行くぞ」

「……………ああ」

「わかりました」

「……………あたしが……………やらなきゃ……………いけないのに」

そんなアリアの呟きを置き、俺たちを乗せたヘリは、豪雨の中件のバスへと急行していく。

『見えませんでした』

機械越しのレキの声。俺は外をみやる。ふむ、アレか。

「何も見えないぞ、レキ」

「見えないのか？ ほら、あのホテル日航の前を右折してるバスだ」

「……………お前等、視力いくつだよ」

『左右ともに、6・0です』

「さあな。見ようと思えば見える」

「……………なんだお前等」

俺はいいんだ、そういう体だから。まあ、まだまだ出てないんだが。

はつきり言ってしまうえば、今の状態の俺でレキと同じくらいだ。違うところといえば、透視も出来る。ふっふー、見える、見えるぞッ！　っていうことも可能だ。……………いや、やらないって。マジでレキに風穴開けられますから！

『空中からバスの屋上に乗り移るわよ。』

——（うんたらこーたら）』

何だかどうでもいいので割愛するけど、どうやらバスに乗り移ってそっから爆弾を解体するらしい。その際、俺とレキは待機、キンジとアリアで強襲。……………別に、いんだけどさ。俺のこと怪しまれない分いいんだけどさ……………。俺だって男の娘だしさ。間違えた、男の子ね。男ならさあ、かっこつきたいと思うじゃん！……………自分を恨むわあ。ううっ。

と、そんなことを考えているうちに二人は行ってしまった様だ。

さて、と。

「レキ、いつてくる」

「いつてらっしゃい」

俺はへりから飛び降りる。尚、さっき言ったとおり、C装備などはつけていない。

そう、制服だ。パラシュート？　くくっ、あると思うのか？

「I can fly」

俺は、飛行中のヘリから——飛び降りた。
雨粒が俺の体を叩く。以外にも威力が高く、当たる度くすぐったい。

自由落下をしながらも、俺は懷からJAKKALを取り出す。

ズガンズガン！

銃から弾丸を下に向けて発射し、反発で落下速度を軽減。反動の大きいこの銃でこそできる芸当だろう。

減速を感じ取った瞬間、虚空瞬動。体勢を変える。頭を上にもつていき、袖からアンカーフックを地面に向けて発射。………仕込んだいたのはいつからとか聞くなよ？

そのまま見事にビルの屋上に着地。ふう、疲れるな。

そこからは、バスと同じ速度で町の建物の屋上を走る。やべつ、足攣った。

走る走る走る走る。完全にバスと並行に走る。ああしいがああ、攣りそうだああああ！！

いつの間にか、バスを追い抜いた俺。足のことをずっと考えていたら先に行ってしまった。てへっ

まあ、これなら好都合だ。どうやら爆弾も見つかったようだ。そして、アリアが負傷。………キンジ、どうすっかな。

そのとき、無線機にレキの声が流れた。……ああ、あれか。

『私は一発の銃弾』

S i d e レキ

『私は一発の銃弾』

私は一発の銃弾。私は狙撃をするとき、いつもこの言葉を言う。

……いや、いつていた、というのが正しいかもしれない。彼と、秋穂と今のような関係になったとき、この言葉の意味は変わった。

彼と会うまで私はただの銃弾だった。何も考えなかった。それこそ、機械の様に。だって、自分は銃弾だから。それ以上の意味は要らないし、欲しいとも思わなかった。

でも、彼が言ってくれた言葉。彼が私にかけてくれた、あの言葉。その言葉で、私という銃弾は意味を持った。持たせてもらった。だからこそ、今はこう謳う。

『銃弾は人の心を持たないのかも知れない』

そうだ。例え私自身が人の心を持たなくても、それはある。

『でも、意味を持つ事は出来る』

意味、私という銃弾の意味。彼は言った。君が銃弾ならば、俺は射手だ、と。

『持たせてくれる射手がいるから』

君が我を持たないならば、俺が君という銃弾に意味を、我を持たせよう、と。

『だから、私は射手に従う』

そして最後に、彼はいった。

『仕留めよう、標的を。仕留めよう、二人で』

私はその時、彼という射手^{あいお}を、私という『個』を手に入れた。

side キンジ

『仕留めよう、標的を。仕留めよう、二人で』

その言葉を最後に、爆弾は分解される。

レキの言葉に、キンジはただ、驚いていた。

以前の言葉とは、意味も言葉もなにもかも変わっていたからだ。
彼女^{レキ}を変えたのは一体誰なのか。あのロボット少女を此処まで人間へと変えたのは一体何者なのかと。

答えを聞かずとも、ヒステリアモードでなくとも、キンジは感覚で感じ取っていた。

蔵義秋穂。

キンジが一年生るとき、夏休み明けに転校してきた、少女のような少年。その少年は、人をひきつける魅力を持っていた。なにせ、キンジ自身も蔵義秋穂という人間に惹かれていた事が分かっていたからだ。

キンジと秋穂が知り合うのは、唐突だった。また、仲が良くなるのもすぐであった。

秋穂が人懐っこいタイプなお陰なのか。それとも他の何かなのか。キンジは深くは考えなかった。

今なら、半年ほどつるんでいた今なら、なんとなくだが、分かる。蔵義秋穂は、レキという自分を銃弾と呼ぶ少女の心を開けさせるだ

けの『何か』を持っている。そしてここまで、その苗字のない少女を少女らしくさせた。

その時、耳にある音が聞こえる。そう——『武偵殺し』の嘗めた合成音声が。

「爆弾が 一つだけだと 思ったから バカなのだよ」

しかし、何かが違う。先ほどの「しやがる」口調でなく、人を見下したような物言い。

キンジは理解した。こいつは『武偵殺し』とは違う。更に、『武偵殺し』よりも何か危険な『におい』がする。

「さてさて もう一つの 爆弾は どこに あるのだろう か？

く は は は は」

「アリアッ！ アリアッ！ 起きろ！ 爆弾がもう一つある！」

キンジは気絶しているアリアを揺らす。しかし、幾ら揺らしても起きる気配はない。

そのとき、バスがガタンと揺れる。

「——！？」

その弾みで、キンジはアリアに被さる様に倒れてしまう。

自分の中で何かが湧き出そうになるのを抑えながらも、キンジは運転していた武藤剛氣に怒鳴る。

「武藤！ どうした！」

「無人のフェラーリがバスに突進してきた——！」

「何ッ！？」

その瞬間、もう一度先ほどと同じ感じの揺れ。

「チィッ！」

凄まじい速さで武藤がステアリングを操作する。

ガコンという音と共に、先程よりスピードの上がるバス。どうやらギアをあげて振り切ろうとしているようだ。

しかし、相手は天下のフェラーリ。幾ら遠隔操作だといっても、バスにおいて行かれるほど落ちぶれていない。

どうやらレキも、フェラーリが予測不能の動きをしているせいでちゃんと狙いを定められていないようだ。

もし、フェラーリがぶつかった衝撃で爆弾が爆発してしまったら……！

ガダン！

もう一度の揺れ。立ちあがろうとして不安定な格好になっていた俺はもう一度、アリアに倒れこんでしまう。

運の悪い事に、今度はアリアの胸のところに顔をうずめる形となってしまう。

やばい、そう思ったときには既に遅かった。
俺の中心で何かがぐつぐつと煮えだし、既に――

「武藤、このバスでフェラーリを置き去りにして独走することは可能か？」

――『ヒステリアモード』に、なっていた。

「キンジ、手前こんなときにそんな口調を――」

「いいから。出来るか出来ないかを聞いているんだ」

「……無理だ。フェラーリは知つての通り、一般車の枠じゃないとしてもない速度を出す事が出来る。さらに、今通っている道は大通りだ。直線で、周りの車が横に避けている状態なんてフェラーリの独壇場だ！」

「……………つまり、フェラーリを粉碎するしか無い、か」

キンジは後部車輪の上に位置する席へと移動する。ここには、非常窓がある。

キンジは非常窓を開け放ち、身を出す。

「オイッ！ キンジ！ 何をする気だ！」

「何するも何も、フェラーリを粉碎するだけだ」

その時、またもやあの『声』が聞こえてくる。

「フェラーリを止めたら その場で 爆発するが いいのか？」

まあ それでも いいが」

「なん……だと!？」

フェラーリを止めないとバスに激突した衝撃で爆弾が爆発するかもしれない。でも、フェラーリを止めても爆発。四方どころか、八方塞がりだ。

「どうするキンジ！」

「仕方ない……まず爆弾を探す」

キンジは耳を澄ます。チクチクチクチク、違う。これは誰かの時計だ。

チッチッチッチッチ……………これだ。明らかに時計の針が揺れる音ではない。

音の所在を探る。

右、左、下。どこも違う。

キンジは天井を見る。

「――!?」

そこには、先ほどレキが破壊したものと、同系統の爆弾が貼り付けられていた。

キンジは貼り付けるためにあつたネジを銃で撃ち、爆弾をはずす。

キンジは爆弾を見て、驚愕する。

その爆弾には――

『はっはっはっは、爆弾なんてないさ。うつそびょん』

なんて書かれていたような気がしたが、既に星になったので今は分からなくなってしまった。

「こちらキンジ」

『何ですか?』

「……二個目の爆弾はなかった」

『……了解しました。それではバスを停止してください』

「了解した。武藤、爆弾はなかった。バスを止めてくれ」

「その……何だ、キンジ」

「……? どうかしたのか、武藤」

「バス、止まらんぞ」

「……………は?」

武藤の言葉を聞き、キンジは啞然とする。

「フェラーリにぶつかられただろ? たぶん、そのときにこのバス

の変なツボに入っちまったらしくてな。……ブレーキが………利かないんだ」

ははは、と武藤は苦笑いする。………いつのまにギャグパートに移行したんだ、という疑問はすぐに忘れたが、どうにも事態がよく分からない方向に向かっているらしいことは分かった。

「……どうしても、無理か？」

「……無理だろうな」

俺たち二人の会話を聞き、乗り合わせていた武偵高の生徒たちが騒ぎ始める。

やれ、死にたくないとか、やれ、降りたいとか、やれ、ママがどーのだとか。正直言って、こちらの方がきつい。

「ちつくしろう。俺はまだ蔵義ちゃんと仲良くもなれてねえのに」

「どうする？ このまま真っ直ぐ行けば、海。目出度く海の藻屑だ。ブレーキは利かない。さらに加速中。頼みの綱のアリアも気絶している。八方塞どころか、今度は十六方塞がりだ」

「……無視^{スル}かよ。……どうしようもないのは変わらないけどな……」

「………！？ 武藤！ 前を見ろ！」

「ん？」

バスの進路を見た、キンジと武藤は驚愕する。それに釣られて同じく前方をみた生徒たちも驚愕。

バスの前方に、目深くフードを被った、コートを着た身長150程度^{ひと}の人が立っていた。

何か考え事をしているようで、口を動かしている。独り言のようだ。

しかし、無情にもバスは止まらず、目の前に立つ人間へと向かっていく。

バスが人間と激突する瞬間、それを見ていた全員が目を瞑る。

ドコン！

画してバスは――止まった。

『……………は？』

一同、同時に素っ頓狂な声を出してしまった。

side 秋穂

俺は今、暴走バスの進路の真ん前、道路のと真ん中に立っている。後ろには海。ここは丁度カーブになっており、このままバスが行けば、直接海へドボン。クリスタルヒ。シくんもびっくりなほどだ。あれ？ クリスタル。トシくんは視聴者だったっけ？ ええっと、もうどうでもいいや。

それにしても雨がうざい。早く止まないかなあ。ああ、お腹すいた。朝ごはんちゃんと食べたのに……………むう。

もうなんか全部めんどくさいや。さっさと仕事終わらせてがっこーいきたい。レキの顔みたい。

俺は手を前に突き出す。バスがくるから危ないもんね。怖い時つて、人間は反射的に手を出しちゃうんだよね。え？ 今の状態とそれは関係ないって？ 知ってるわバカチンが。

ブオオオオン！！

何だかD。5の巨大モンスターの名前みたいな音を立ててバスが向かってくる。いやあ、あれは面白かった。ちょwルド。ン氏ねw

wといったのはいい思い出。何だアイツ、結婚イベントの時に話しかけたらワシと結婚したいと申すか！　って、俺はそんな趣味ないからね。さっさと天。の盾寄せさせて。物分りの悪いゲーハーだ。ドコン！

と、そんなアホな思い出に浸っているうちに、俺の手とバスがぶつかった。若干ひりひりする。お腹がすいて力が出ません。一応、フード付きのコートをふかーく着込んでから俺ってことはばれないだろうけど、ちょっと怖いんだよね。

ババンババンバンバン、リリリリリラ、

そんなわけで、バスを片手で止めてみた（何かニコ×2動画で投稿されそうな言葉だ）俺は、誰にも見つからないように、光の速さで脱兎の如くその場を離れた。……脱兎は光の速さでは逃げないね。そんな兎、誰も捕まえられねえよ。

この件について、後に学者たちの間で議論が起こったことは、今はまだどうでもいいのだ。ついでに言えば、ニコ×2動画で動画が配信される事となろうとは、俺はあんまり思ってもいなかった。

「そんなわけで、俺はちょーびつくりしましたー」

「58点」

「クウ！　キビシー！」

というわけで、脱兎の如くレキのところに来た俺は今までの自分の精神状況をお話していたわけで。俺の精神は58点でした。わーやったね！　ちょーうれしー。

「……非常識過ぎる」

「俺の何処が非常識なんだ！　こんな常識真面目人間他に類を見ないぞー！」

「飛行中のへりに飛び乗ってくる常識があつたら、世界中大混乱」
「ならばそれを完全な常識とすればいいのだよ！　ふはははーはっは」

そんなこんなで、俺の大好きな雨の一日は終わった。やっぱり、雨は好きだ。だって、レキとこんなにゆっくりお話できたから。

……………　そういえば、レキと初めて会ったのもこんな土砂降りの日だったっけかな。

まあ、これが学校を丸一日さぼった理由にはならないんだけどな！

教務科のせんこーに、後日こつてり絞られた俺であつた。

その夜、俺はまた夢を見た。

レキとほのぼのピクニックをする夢だった。

レキはいつものドラグノフの変わりに、お弁当の入ったブランケットを持っていた。

俺は、何故かレキにずっと抱きついていていた。よくよく見ると、それはレキじゃなくてドラグノフだった。

ブランケットがレキだった。

ジャッカルの精というのにも会った。何だか、どこかの映画で見たような感じのウィリアムなんとかだった。

起きたら寝違えていた、という夢を見たという夢も見た。気がついたのは深夜２時だった。また、寝た。

………なんだこのカオス。ちょー眠い。そんなわけで、起きたら7時50分で、また遅刻したなんてことがあったような夢を見ているんだろっなあと思ったら、現実だった。普通に怒られた。

………っっていう夢だったんだZ E 何十伏線だこれ。

第六弾（後書き）

随時、感想、要望、批評をお待ちしております。
評価もしてくださるとうれしいです！

運営からのお知らせにより、歌詞転載の規制が強化……というか、
改めて敷かれましたので今回の話しに出てきた『魔弾』の正式歌名
を修正しました。ご容赦の程を。

第七弾（前書き）

今回は前回に比して短めです。……前回は長かったただけですが。そして今回は裏話。秋穂ちゃんも裏方です。まだ、ね。

お気に入り登録がドバツと増えました。ワイ。何だこの88件で。怖い怖い。

なんだか書いてるうちにしんみりしそうになったから無理やりはっちゃけたので、そのせいでおかしい部分がいっぱいあると思います。ミツケタライツテチョー。

うにゃーっす、では、どうぞ。そして秋穂のキャラがどんどん定まらなくなってきたぞい。

御茶でも飲みながら（・ω・）つ旦 読んでね♪

第七弾

第七弾

『伏線を立ててみる、w k t k』

「——あんたじゃ、なかつたんだわ」

そんなアリアの言葉の後、病室から出て行くキンジ。俺がドア前の壁に寄りかかっている事にも気付かず、そのまま病院から出て行く。

憐れと言うか、何と言うか。まあ、別に励ましてやらない事もない。でも、俺はしない。

何でかって？

キンジのためを思って？ ふつ、違うな。

——面倒だからだッッ！！

友達として最低だとかなんとか言うなし。しょうがないし。めんどいこととタリイ事には関わらない事にしてるんです。

ま、それでも此処にいる俺は何なんだって話だけだな。

自分で考えて自嘲気味に笑ってしまう。いやあ、何で俺がネタ精神を制限せにやなんのか。恨むぞ、大宇宙の意思とやら。

そんなことを考えながら、俺は病室のドアを開ける。

ガチャ。

パッチンパッチンパッチンパッチン。

——神は言っている。此処で声を掛けるべきではないと。

アリアはまだ髪の毛をパツチンパツチンしている。断じて神パツチンではない、髪パツチンだ。

でも、その止める姿には何処か力がない。現に、俺が普通にドアを開けて入ってきたにも拘らず、此方を見ようとしな。気にされないなんて、俺、傷ついちゃう！……ごめんなさい、嘘です。アリアの近くに転がるコンビニの袋。キンジが買ってきたももマンが入っていたヤツだ。……結構入ってたはずだけど、もう食べ終わったのか。早食いは太る事の原因になるぞ。俺は幾ら食べても太らないんだけど。体質……というか、まあ、そのうち分かる。

パツチンパツチンパツチンパツチン

——1個違うの混ざってたけど、気にしないでおう。日本人はスルースキルに定評があるからね！……まあ俺が日本人かどうかは教えてやらんが。……ぶっちゃけ日本人じゃない。キヤー、超展開k t k r。……何かもう、頭が吹っ飛びそうだ。

そして再三言うが、髪パツチンだ。絶対に神じゃなくて、髪な。

正直、時を止めたり神に介入されても困るし。

必然「キングクリームゾーン」？ だっけ？……時間が消し飛ばとかなんとか。あんまり詳しくは知らないけど。あ、あれは神じゃねえわ。神より強いんだっけ。ついでに言えば俺は………耐えられない。俺じゃあ、な。含みのある言葉ってカッコイイよね！

ってか、話し戻すけど、地毛で髪の毛がスカイぶるーのやつっていると思うか？ ハッ、冗談は顔とアニメの中だけにしてくれ。そんなわけで、俺はいろいろと訳有りなんだ。ってことで、現実逃避しゅーりょー。

やっとな俺の侵入に気付いたアリアが、此方に銃口を向けている。

あはは、こわいこわい。

反射的なものなんだろうけど、銃口を向けられるって言うのは何時になっても慣れない物だ。

「……………何しにきたの？」

「まずは銃を降ろしてもらいたいなあ、って」

「……………分かったわ」

渋々という感じで銃を降ろすアリア。顔を見ると、額の傷が分かった。たぶん治らないんだろうなあ。

「何しに、か。……………何しに來たんだろうなあ」

「……………意味わかんない」

「大丈夫だ、俺も自分の事はあまり分からん。でもな、お前を励ましたり貶^{けな}したりするために來たわけじゃない事は確かだ」

「……………」

押し黙るアリア。ううん、どうしたもんか。こないだひっぱいたことはもう覚えていないようだ。子供^{がき}で良かったわ。

「失望したか？」

「……………え？」

「キンジに失望したか？ 思っていたものと違ったか？ 自分の勘違いだったか？」

「……………その通りよ」

「ふむ、そうか。アリアがそう思うのならそうするといい。でも、な」

「……………何よ」

「人間、そんなもんだ」

人間、そんなもんだ。期待されて期待された分だけ返せるやつは少ない。いや、完璧に期待された分だけ結果を出す事なぞ、出来るのかどうかも定かではない。期待は嬉しい気持ちと共に、プレッシャーにもなる。まあ、キンジの場合は特殊だし、この例には漏れるだけだな。……じゃあこの例の意味ないじゃん！　っていうツツコミは置いといて。

「で、だ。キンジに言ったのか？」

「何をよ」

「帰るんだろ、あつちに」

「な、何であんたがそんな事知ってるのよ！」

「それはこの際どうでもいいだろ。で、どうなんだ？」

「キンジは……アイツはもう、あたしとは関係ないわ」

「ふーん。ま、それならそうでいいんだけどさ。それじゃ、俺は行くわ」

俺はドアに向かう。もう特にいう事はない。アリアが言いたくないというなら、それはそれでいいんだ。だって俺には関係ないからな。ハッハッハ。

「あ、ちょ、待ちなさいよ！」

「やだよん」

アリアの言葉を見殺し、俺は病室を出て行った。

「もう……。本当……。一体何者なのよ」

そんなアリアの呟きは一応聞こえていたが、スルーすることにした。

何だかき、最近俺、裏方ばかりなんだよねえ。表っちゃ表なんだろうけど……。なんていうか、そのノベルで言う脇役みたいな位置になってないか？ ああ、くそつ。イライラするなあ。こういうときこそレキに会いたいんだけど、どうやら依頼に出てしまっているようだ。俺に一声かけてくれたっていいじゃないか。

なんてことを考えていても、事態は好転しないっていうのが、ジレンマっつーか、なんていうか。

イ・ウーとか正直マジでどうでもいいんだけどさ。

アハハハハ。なんだか、今そのことを考えた瞬間体がガガガツと重くなったような気がするんだよね。いや、勇者王ではなく。まさかガイアか……。！？ 修正力か、オイ。

「あつはつはつはー、つてなわけで、俺参上！」

俺は近くに誰もいない事を確認して叫ぶ。

ここは新宿警察署。言わずもがな、アリアの母親、『武偵殺し』その他諸々の容疑で逮捕、二審までの判決が決まっている神崎かなえが留置されているところだ。まあ、何でこんなところに来たのかっていうと、長くなるので割愛するわけなんだが。

俺は、アリアとキンジが面会時間を終了し、出て行ったところで参上。勿論、電ラ。ナーに乗ってきたわけではない。徒歩だ。

「てれすてつてれー。やあ、こんにちワン。かなえっつい」

「……………」

なんかめっさ睨まれてまんがな。
というわけで、俺はかなえつていと面会中。

「何さ何さ！ 無視ばかりしてさ！ オイラ、傷ついちゃうでござるよ」

「で、今日は何のようですか？」

やーらかい笑顔で接客してくるかなえつてい。無論、営業スマイル。

「さあ、何の用でしょうか！」

ピンポーン！ クイズ番組でよく耳にする回答のスイッチオン。
何処から出したとか考えたら負けだと思う。ついでに言えば俺は勝ち組。

「はい、かなえつてい！」

「暇潰しでしょうか」

「ピンポーン！ 大正解！ そんな貴女には、このアリアとキンジがくんづぼぐれつしている写真をプレゼントオー！」

「あら、もう面会時間が」

「ハッハッハー！ 面会時間の制限はないのだよ！」

「ナ、ナンデスッテー！？」

かなえつてい、ノリが良すぎです。キャラ崩壊してるよね？ …

…ごめんなさい、俺が壊しました。

かなえつていはあれなんだ。アリアとかその他の人の前ではいつもと変わらない和み&癒しオーラを漂わせたフローラル美人さんなんだけど、俺の前では何かぶっ壊れてる。全体的に。

あと、面会時間無制限は本当の事だよ。

「と、そんなことは置いて。どう思つかにゃー、あの二人」

「わたしはお似合いだと思いますね」

「だよにゃー。ううん。キンちゃんかどんきゃーんなのと、アリア嬢がツンドウレーなのがねえ」

「アリアはツンデレなんですものね。……ハッ！ アリアがツンデレ！ 略してアンデレ！」

はつきり言って、かなえって俺よりアホ要素（素養？）でかかないか？ うーん。気にしないことにしよう。

「さっさとして欲しいもんなんだけどねー」

「そう言うなら、貴方がアリアとパートナーになってくださればいいんですけどね」

「ダメなんだよー。俺には既に生涯のパートナーというモンが要るわけさー」

「貴方にもそんな人が出来るんですね」

「おっと、銃が懷からワー」

ガチャン、と俺はワザと懷からJAKKALを落とす。

「いやいや、落ちた衝撃で発砲しちゃったらと思ったら怖い怖い」

「なんでもないです。はい」

「ん？ かなえってどういうしたのさ。頬が引きつってるぞーう」

「本当、ナンデモアリマセンよ。ふふっ」

ほらほら、更に頬が引きつっていますよ。

「で。行き成りなんだけど、刑期が一気に減る……ってか、即釈放できるとすれば、どうする？」

それは、衝撃的な一言。神崎かなえは既に864年の懲役の宣告を受けている。

それが、一気になくなる？ 即釈放？ あまりにも夢物語過ぎる言葉だ。それこそ、天と地が逆さまに成るほどの。

「いえ、遠慮しておきます」

「やっぱりな。敢えて、理由は聞かないでもいいか」

「そうして貰えると、助かります」

何故、神崎かなえは此処でYESと言わないのか。NOと言わない日本人とかいうが、日本人は普通の日常会話では基本的にはNOとはいわないんだよ。いいえっていうんだ。っと、どうでもいいかそんなことは。

「それじゃ、俺は帰るとすっかな」

「さようなら」

「次に会うときは、最高裁のときかな？」

「いえ、街角でも」

「ククッ。案外、やってくれるかもな、アリアが」

「案外ではありませんよ。きつとたぶんです」

「親としてはどうなのかねえ」

「どうでしょうかね。ふふふっ」

かなえつていの言葉を軽く聞いて、俺は面会室から出て行った。
あ、まだやることあるんだった。

俺は管理官室に向かって歩きだした。

ガチャリ。俺は管理官室のドアを開ける。

「何だお嬢ちゃん。此处は関係者以外立ち入り禁止だぞ」

そんな言葉を吐いたのは、アリアとキンジの面会時にかなえつて
いを羽交い絞めにした男。

俺はかなえつていとは、友達……なのかなあ。まあいいや。友人
っぽい感じだ。この男の行動にアリアも大層憤慨していたようだが、
社会的にはただのガキのアリアが管理官を入院でもさせてみる。武
偵としての資格剥奪では済まされない。親子一緒に裁判だヤッホー
イになる。

と、そんなわけで。

「あつはつは、かなえつていは友人の一人だ。例え今犯罪者の身分
であろうと、あんなことをされて黙ってるほど俺もお人好しじゃな
いんでね」

「何を言っているんだ!？」

カチャ、パン。普通に懐から愛銃を取り出して、その管理官に向
かって打つ。

例によって空気砲だけどね。

「あ……ぐう……」ボタン。

運がよく、今管理官室にはこの男しかいない。俺はこの男が気絶
している内に、かるうく催眠術をかけておく事にする。

俺は寝ている男の耳元で囁く。

「お前はヘンタイだ。お前は起きたら記憶がなくなっている。お前
はクズだ。お前はこれから一切女性に触れることは出来ない。お前

は男が好きだ。お前はお前は……（以下無限ループ）

ふう、すっきりした。俺は管理室をあとにし、新宿警察署の前門から悠々と出て行った。

嗚呼、勘だけど何だかもうすぐ面倒なことが起きそうな予感だ。それも、とんでもなく。勘だけど。

まだ、序曲なんだろう。まだ、始まりなんだろう。まだ、終曲は遙か遠いのだろう。

でも、俺が自分を晒す日も近いのかも、な。

さあ、早く動けよ。弟子。さあ、早く動けよ。歴史。

嗚呼、我が家も解禁かもしれないな。

第七弾（後書き）

かなえさんの口調って難しいのよ。なんにしろ、資料も何も少ないからね。そして少しwikiみちゃったのよ。あらあら。まあ、wikiみといてよかったなあ、と。

このままいくと矛盾の塊の叩かれまくりのアフォ小説に早代わりするところでした。

ではではバイナラなのよノシ

第八弾（前書き）

今回は短いのです。そしてたぶん次回で一卷完結なので更新一ヶ月くらい凍結になります。

お気に入り110件越えですって！わーびつくり。こよこよ。今回はプロント語が若干含まれています。そして眠いのでいつもどおり内容が狂っています。スランプですねわかります。ってか、いつものことでしたねそうでしたね。

そんなこんなで私の眠気とたるさが超マツハ。

さあ、読んでしまうのか。あららら、読んでしまったらお気に入りに登録するまで帰れません。尚、この投稿は予約投稿ですね。出来たのは三時頃。

では、お休みなさい。

第八弾

第八弾

『飛行機が 乗っ取られた！ らしい 知るか』

キャツキャウフアハハハハ。ウニヤニヤニヤーン。フハハハ
ーン。

と、何で俺がこんなにはしゃいでいるかというと、まあ、単純に
レキと一緒にいるからなんだよ。

あと、この間ゲットしたレオポンの名前を考えたんだ。レキとレ
オポンを足して『レオポン』だっ！ いい名前だと思わないか？
そうかそうか。先生は物分りのいい子は好きだろう。ああ、レキレ
キレキレキレキレキレキレキ。レキイーツ！

「ふ……ふふ…… フツハハハハハハ！」

「秋穂、大丈夫？」

「大丈夫だ、問題ない」

俺は親指をグツと立てる。何かもう……この台詞自体がパーフェ
クツにフラグとか何とかな気もするが、気にしたら、それこそお旗
が立ってしまうので深く考えない事にしよう。何事も、気にすんな
！だ。

「……………そう」

レキは何か遠い目をしながら地平線の方を見やる。……オレ、そ

んなにダメな子かな？ まあいいや。気にしない。

此処は女子寮の屋上。の、屋上までの階段を上りきったあとのひさし廂の下。風が強いからね。時刻はもうすぐ午後6時になりそうなくらい。辺りは茜色に染まっている。あ、あそこに見える坂が凄い茜色に……………あれが茜色に染ま。坂か……………っ！

「違うと思う。それに、その言葉はいろいろと危ない」

「何か、最近レキの読心スキルが上がってない？」

「秋穂は……………顔に出やすいから……………」

「そんなバニヤニヤ……………」

「……………ほら、ワザとそうやってるみたい」

あらら。レキにかかつちゃ、俺のこれも通じないのね。まあ、あの程度は素つちや素なんだけどね。

とり合えず、てきとーに誤魔化すことにする。

「ハハツ、何のことだ？」

「……………何でも、ない」

「いやあ、それにしても綺麗だ」

俺の唐突な話題の転換に一瞬戸惑ったものの、レキは茜色の夕焼けを見る。俺はそのレキの横顔を見る。うっ、やばい！ 破壊力がとんでもないです！ ダメだ！ 防ぎきれないイイ！！

「……………何考えてるの？」

「いやなに、夕焼けよりレキの方が綺麗だぜ、ってな」

俺は更に唐突に爆弾発言。その言葉に頬を紅く染めたレキはいつもの様に言う。

「……バカ」

「バカでいいよ。人間、ちょっとバカなほうがうまくいくさ」

「ちよつとじゃ、ない」

「……シヨボーン」

若干傷つきました。

こちらら、伊達や酔狂でガラスのハート名乗ってんじゃねえんだよあ！ とは誰の言葉だったか。

違います。激しく違います。

「と、ありゃあキンジか？」

俺は街中をダッシュしているキンジを見つけ、指をさす。

「たぶん」

俺たち二人ともしつかり認識してはいるが、もしこの場に俺たち以外がいた場合はそいつは認識できないだろう。だって俺たち視力逝かれてるんだもの。

「しょうがない。これも『仕事』の一つだ。ごめんごレキリゅん、いつてくるわ」

「いつてらつしやい」

「まあ、さつさと終わらせたいんだけどな」

「『仕事』ならしつかりやるべき、そうすべき」

「プロ語なことには突っ込まない、それ大事だね」

「私の元気の下がりマッハ」

「………いきます」

俺はそれ以上何も考えないように、屋上の手すりの方に歩いていく。手すりを乗り越え、地に立つ。

そっからは普通に考えて分かるとおり、まあ、自由落下運動というやつだ。

タン、と地を蹴り、俺は風と重力に身を任せ落下していく。空中で正体隠し用のコートを取り出し、羽織る。

地面に着くスレスレのところで一回転し着地。

周りの目を気にせず、俺はそのままキンジの向かっていった方向——羽田空港へと全速力で疾風の如く走っていった。

……困った、迷った。羽田空港でけエ！ やべエ！ とか考えながら歩いていくうちに軽く迷った。

まあ、すぐにキンジを見つけられて良かったんだけど。俺はキンジを追いかける。

キンジを追ってついたのは、羽田空港第二ターミナル。ANN 600 便なんたらかんたらって表記されている飛行機。

「——武偵だ！ 離陸を中止しろ！」

……いや、普通無理ッしょ。キンちゃんよく考えて行動しようねー。君が話しているCAにもよく気を配ろうねー。まーいいやー。結果はやはり無理。そりゃあね。当たり前さ。どうやらキンジは飛行機に乗っていくようだ。……俺もいったほうがいいのかなあ。……でもなあ、面倒くさいなあ。ま、いつか。……どうせ俺は今
は裏方さ。チッキシヨー。

キンジはその飛行機に乗り込む。俺はその後を追うCA（笑）に声を掛けてあげることにする。

「へーい、そのCA（笑）」

「……何でしょうか、お客様」

作ったような営業スマイル。……さてよ、営業スマイルはもとから作ったもので、この営業スマイルは更にその営業スマイルよりも室が低いわけになるんだから、それはもう既に営業スマイルというか素人スマイル？　んなこたあ、どうでもいいんだ。

あとは、俺が真っ黒のコートで体を全部隠しているからなんだろうけど。

「お顔の化粧が剥がれてやがりますよ、CA（笑）」

「——！？」

「クハハハッ！　なあんてな。そうだ、CAサァン、言伝を頼めますかね。くくっ」

いやあ、なんか笑いが出てきちゃうわけよ。なんでだろうね。いやいや、分かる嘘ほど滑稽で面白いものは無いんでね。うわあ、俺って結構^{まが}凶ってるのね。

「……どなたにでございましたか」

「オルメス……いや、4世？　それともキンジ？　それとも金一？

H？　R？　それとも教授？　ハッハッハ！　理子嬢に、な」

「そのような方は乗客名簿には載っておりませんが……」

「そうかそうか。なら俺は君に言うことにしよう。『何世立っても過去は何も覆らんよ。ヴァーカ』ってな」

「——ッ！」

咄嗟に銃を抜くCA（笑）。人が周りにいなかったからまだしも、こんな公共の場所でそんなもんを振り回すのはやめようね。お兄さんの約束だ！ お姉さんとかいったやつブチクロスぞ？ なんてアフォなことを考えている場合じゃなかった。

「ほらほら、早くしないと乗り遅れちゃうぞー。クハツ、CAが乗り遅れるなんてバカな事はしないようにな。きちよーにどやされちまう」

それだけいつて俺は去る。声の感じを変えて喋ったからたぶんばれてないと思うけど、ばれてたらやだなあって。まあ、遠かれ近かれいつかはばらすし、今ばれても大した事無いかなあ……。うん。

「そんなわけで、てきとーに喧嘩つばいの吹っかけてきた」
「43点」

最低得点更新だった！ 俺の精神状況以下の点数だった！ そんなわけで、俺はまた女子寮の屋上に戻ってきた。

「それでさそれでさ、今日さ、すっごいいやな予感するんだよね」
「……また？」
「YES YES YES！！ SO YEEEEEEES」
「Shall up」
「すいまえんでした……」

シャラップって使くとマジ切れちゃうんだってね。俺は心がちょーひろいから大丈夫。いや、キンジに言われたらぼっこばこのバラバラ惨殺やけんほんままじで。何言ってるか自分でもわかんない。

何て感じで喋っていたら結構時間が立ってしまったようだ。そんなとき、俺の携帯に着信が入る。

『~~~~~』

「もしもし？」

『あ、蔵義ちゃん？ オレ、武藤』

ピッ。俺は通話終了ボタンを押す。

『~~~~~』

「もしもしね」

『ひでエ！？』

……ってか、何でこいつが俺の携帯の電番知ってんだよ。誰が教えてたし。

「で、何のようだよ」

『——さっき、羽田発の飛行機が一機ハイジャックされた連絡があったんだ』

「ふむ、中にはアリア嬢が乗ってるってところか」

『知ってたのかよ』

「いんや、勘だ」

『流石蔵義ちゃん、そこに痺れるあこが——』

ピッ。

『~~~~~』

「しね」

『また!?!』

「どうした武藤、股がどうかしたのか？」

『古いっ、古いぜ蔵義ちゃん!』

「うつさいなあ。でえ、何で俺に電話してきたわけエ？」

『いや、なんとなく』

ピツ。設定、着信拒否……ええっと、先ほどの電話番号。よし、と。——武藤は何のために出てきたんだろうか。

「ねえねえレキい」

「頑張って」

「ひゃっはー」

「ひゃっはー」

.....

「もういいよ！ なるようになるさ！ 面倒くさい！ レキはうちのクラスいつて！ 俺はちゃっちゃとやっちゃっから！」
「……わかった」

レキは小走りで女子寮の階段を下りていった。

俺もその後に続くようにして、今度は階段から降りる。

レキはうちのクラスへ。俺は、お隣の空き地へ。

「ああ、くそくそ。何でこんなときにやる気ださにゃあ、あかんのか。どうせ俺は裏方の裏方か。ああ、自分が恨めしい」

俺は呟く。恨むように、でも、開き直ったように。

「さあさあ、今宵のアーサー王の伝説は、ってな」

第八弾（後書き）

随時、感想、要望、批評をお待ちしております。
評価もしてくださるとうれしいです！

第九弾

第九弾

『^{アーサー}王の昔話』 『青い髪の少女』

『空き地島』の上に、一人立つ少女がいる。

スカイブルーの髪を纏める事も無く、無造作に広げている。

茶味がかつた黒の目。その容貌は、蔵義秋穂その人と酷似していた。

もしも、蔵義秋穂を知っている人間が見れば、これは蔵義秋穂ではないと言っだろう。

それは何故か。結論は簡単、蔵義秋穂は男だ。

どんなに少女のような外見をしていようと、（一部納得していないものもいるにはいるが）自他共に認める『男』なのだ。

この少女は、女性特有の胸がある。大きいわけではないが、確実に確定的に本物の胸がある。

もう一つ挙げるとすれば、雰囲気であろうか。

この少女は、蔵義秋穂にはあった、明るく綺麗な雰囲気が、全くと言っていいほど、皆無であった。

この少女の持つ雰囲気は、色で言うなら黒。無数ある色の中で明度が一等低いとされる、黒だ。

それほどまでに、少女は禍々しい。だがしかし、その黒という暗黒の中でも、確実に輝いている。黒光りするGとは何の関係もないわけではあるが、黒は黒でも、気高く光る黒^{ひか}。さながら宝石の様に。

ただ、もう一言言うのであれば、

——この少女は、確実に、人を超えている。

上空、空飛ぶ密室の中では熾烈な戦いが繰り広げられている。よ
うな気がする。まあ、戯言ととってもらっても構わないんだけど。
私は遙か上空を見やる。辺りはほぼ完全に黒に塗りつぶされ、普
通に見れば視界0の暗黒だ。暗黒太極拳うくでんではない。そして、当
然だが、何も見えはしない——分けではない。私の目には、まるで
昼の様に世界が見える。

風が豪と吹き荒れる。嵐の前の暴風雨とは何のことだったかしら。
……今は関係ないわね。

風力発電機のプロペラが許容オーバーといった風にガタガタと揺
れている。

そして何よりも——

このポジ完全に裏方ですね、本当にありがとうございました。

まあ、私には私のやることがある。『お仕事』だからっていうの
もあるかもしれないけど、何よりも……ま、個人的な理由に他なら
ない事には変わりはないんだけど、結局は柄にも無く、彼らを助けた
いただけだったりもして。

ハア、どうしてか若干シリアスな気分なのよ。いつもの分の反動
かしら。こう……もっと、何ていうのかしら、戦意を、やる気を搔
き立てるものが欲しいのよね。いつその事飛行機ごと撃ち落しちゃ
おうかしら。……怒られるしダメね。とっても残念。

私は自分の手元——といっても、手元と言っていい位置にあるの
かは定かではないが、一つの銃……いや、これまた銃と呼んでいい
のかも分からないような……って一文が長すぎるからちよっと切る

わね。

大砲、と呼んでも差し支えないのかもしれない。鋼鉄破りとは規格も何も根底から違う何か。つまるところ、

——デンドロビウムですなわかります。

間違えた。デンドロじゃないわよ。んなもんを持つてるわけ無いでしょうが。

このアフォ銃の名前は——ハルコンネン？。30mmセミオートカノンで、2門に砲弾補給用の巨大なコンテナボックスを繋ぎ合わせた物だ。最大射程距離は4km、総重量345kgでありながら、人が持ち運び座ったまま使用するように出来ており、コンテナは背負えるようになってる。弾倉部分であるコンテナを取り外し、ベルト給弾式にして運用する事も出来る。砲身には「Vladimir ウラディミール HALLCONNEN」と刻まれている。

っていうのは、wiki参照なのよ。流石wiki、頼りになる

ま、今はそういうメタリックな話はしなくてもいいのよ。『仕事の時間でもあるしね。』

「~~~~~」

私は唄う。ただ、なんとなく、こういう銃を構えるときはこの歌がしっくり来る。

「~~~~~」

正直に言えば、私は今わくわくしている。何しろ、表に出るのは久しぶりだ。あっちは闘争が嫌いみたいだけど、私は好き。私の反動かしらね、それとも——

「~~~~~」

——怖いのか。私には分からない。自分のことであるはずなのに、まったくもって理解し難い。

まあ、今はそれはいいんだ。実際のところ、あつちはあっち、こっちはこっちだ。二重人格とは違う。

「~~~~~」

『パンパン！！』

ヘッドフォンから私の耳に銃声が届く。それは空中での音だ。空中といっても飛行機の中、つまり盗聴中なわけ。キンジの服に仕掛けておいたんだけど、しっかり動いてくれるみたい。幾ら私でも、空を飛んでいる飛行機の中の音までは聞こえない。……………と思う。ぶっちゃけ、試した事は無い。

どうやら、飛行機の中は中々にクライマックスのようだ。……………何で今の今まで作動してなかったのかは気にしないことにしておこうかしら。

峰 理子。本名は峰・理子・リュパン4世。彼^かの大怪盗、リュパンの曾孫……………だったはずね。

神崎・H・アリア。こちらは、リュパンの宿敵、世紀の名探偵、ホームズの曾孫……………のはずよ。

ふ、不確定口調なのは別にうる覚えだとかそういうことじゃないのよ！ 偶々！ 偶々今思い出せなかっただけ！ それ以上考えたら、ぶち抜くわよ？！

ふう。それと、映画ルパン三世ではライバルが銭形警部だけど、あれは違うわよ。全く別物の話よ。今思い出したんだけど、あの映

画の主題歌はルパンルパン♪じゃなくて、ルパン・ザ・サード♪
って言ってるのよ？ 知ってた？ 知らないわよね。シッテルワケ
ナイワヨネ。……もう、自分で誰に話しかけてるのか分からなくな
ってきたわ。

それにしても、歌、止めちゃったじゃない。……まあ、いいわ。

まだ上では戦いが続いているようだ。ヘッドフォン越しに会話が
聞こえてくる。

『峰・理子・リュパン4世——』

『——殺人未遂の現行犯で、逮捕するわ！』

クライマックスというかガチクライマックスじゃない。クウー、
いいわいいわね。私も混ざりたいくらいよ。

『そっかあ、ベッドにいと見せかけて、シャワールームにいと
見せかけて——どっちもブラフ。本当はアリアのちっこさを活かし
て、キャビネットの中に隠してたのかあ……すごおい。ダブルブラ
フって、よっぽど息があつていないと出来ないことなんだけどねえ』
『不本意ながら一緒に生活してたからな。合わせたくなくても合う
さ』

『二人とも、誇りに思っているよ。理子、此処まで追い詰められた
のは初めて』

『追い詰めるも何も、チェックメイトよ』

『ぶわあーか』

もう少し「ぶわあーか」の発音を綺麗にして欲しいかな。今度叩
き込もうかしら——『正しい罵り方』。まずは巻き舌で……面倒だ
からやっぱやめよう。

と、そんなことを考えてるうちに話は進展しているようだ。

『ご存知の通り、^{ワタクシ}武偵殺し』は爆弾使いですから』

……うん、絶対結構話が進んでるよね。本当に（ry

『ねえキンジ。この世の天国——イ・ウーに來ない？ 一人ぐらいならタンドム出来るし、連れて行ってあげられるから。あのね、イ・ウーには——』

理子は其処で一度言葉を切る。

『お兄さんも、いるよ？』

その言葉に対してキンジが静かな怒りを露にする。その場にいれば怒りの度合いがよくわかるだろうが、如何せん、今は近くにいないから関係ない。はっ、関係ないね。

てかさー、イ・ウーとかマジでどうでもいいのよね。相手にするまでも無いんだけど、どうせあっちから来るでしょうし。その時はその時で対応すればいいんだけどね。

『ドウツツツツ！！！』

馬か！？ 飛行機に馬が現れたのか！？ ……どうどうだから馬じゃないか。

まさか飛行機の中では荒木ワールドが展開されているとでも！？ ドトドトドトド！？ そんなわけないですかそうですか。時は止まっていますかハー！

実際は爆発音ですね。わービッグバン！ 否、グランドクロウス！ 太陽系が消えますかそうですか。

そこから私はヘッドフォンを外す。これ以降は無くて大丈夫だ。

私はハルコンネンをセットし、上空を見る。

理子を視認した。流石に今殺す気などは無い。理子は服をパラシユートにし、羽撃たいていく。

それと入れ替わりの様にして、ミサイルが二基——飛行機めがけて飛んでいく。

つまり。

此処からが私の『仕事』だ。

もう一度、ハルコンネンを調節する。ミサイルは雲を切り、AN600便に向かって一心不乱に飛んでいく。また、その速さが落ちる事は無い。今直撃すれば、コース的に確実に羽のジェットエンジンに当たる。

今、私がみる世界は、常人の見る時間の1万倍の速度。

普通に狙いを定めるな。額にもう一つの目があるようにして見る。と言われた記憶がある。随分と昔の話だ。

見える、まるでハイスピードカメラの映像の様にミサイルの軌道が分かる。

「当たる当たらないじゃない、『当てる』」

息を整えることはしない。

高揚感、それが体を支配する。

「この弾丸が私を保つ」

今にも暴走しそうだ。

自分で自分が制御できない。

「私が壊す、全部壊す」

『狂』、それがしつくりくる。

あまりにも私は凶^{まが}つている。歪^{イビツ}過^{ヒツ}ぎる。
だけど、それでイイ。

「さあ、踊れ踊れ。王^{アーサー}の御前でさあッ！！」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！！！

引き金を引く引く引く引く引く引く引く引く引く。狂ったようにセミオートで乱射する。

「アハッ、アハッ、アハハハハハハハ！！　クハハハハハハハッ！！！」

だがしかし、銃弾一発もミサイルに直撃しないものはない。

撃ち出した全ての弾丸が、まるで自分から引き込まれるように進んでいく。

ハルコンネンのコンテナから空薬莢が凄まじい速度で排出されていく。

ドゴゴオン！！

二基のミサイルは見事に粉碎。

見た感じでは、被害はなし。ヒステリアモードのキンジなら着陸させる事くらいできるだろう。

しかし、これで終わりではなかった。いや、理子やイ・ウーの作戦は確かに終わった。表の物語はハッピーエンド確定だ。……機体に穴が開いたから、それはそれで大変な事になってるかもしれないけど。

「（まだ、だ）」

此処からは、完全に私だけの戦いがある。

もう一度、ミサイルが飛んでくる。
空き地島の私に向かって。

先ほどのミサイルはよく見ていなかったが、今回私に飛んできたミサイルは一瞬で理解する事が出来た。

V2。

確実に、私個人に向かって発射された、完全に過度攻撃オーバーキルの一撃。

「クククツ……アハハ……アハハハハハハハハハ！！！！」

ハハハハ！！面白い事をしてくれる。こんな事をするのはヤツ等しかない。そんなに私が憎いか。そんなに私を消したいのか。それともそれとも、他の何かか。

そんなことは結局はどうでもいい。今は今を楽しむだけ。

——この少女は異常だ。ミサイルを撃墜するのもそうだが、確実に頭のネジが二・三本抜け落ちている。

否、それだけでは足りないかもしれない。元からネジを締めてすらもないかもしれない。

ミサイルが自分に向かってきている絶対絶命のこの状態を、楽しむといったのだ。これを異常といわず何と云うか。

自分で自分を凶っているといい、歪んでいるという。まるでそれこそ、狂った、戦を求める『狂戦士』^{バーサーカー}のように。

しかし、『狂戦士』は果たして自身の心配をするのであろうか。はたまた、心配という言葉を知っているのか。

狂ってしまった王^{アーサー}の率いる国は、全てを破壊し、最後には己さえも破壊するのか。

私はコンテナ上部に設置されているハルコンネン？の追加兵装を、銃身に装着させる。

ガコン、という音と共に装着が完了し、照準を定める。

「爆散して炸裂してぶっ壊れちゃえ」

ズガガン！！ 壮絶な爆発音と共に、ミサイルが空中で爆散させられる。

炸裂したミサイルから火の手が上がった。

その火の中から、人が二人現れる。

私は軽い調子で問いかけた。

「あらっら？ 随分ド派手な登場じゃない？」

火の中から出てきた二人は、空中から見事に着地し、私の前に立つ。

「kyハッ 王sまア？ 神sまgaよんでルよう？」

「あの御方からの命で、貴女様を御連れさせていただきます」

片方は、身長が130cmもなさそうな白ゴスの少女。もう片方は、これぞ執事って感じの髭紳士。ヒゲジェントルメン

少女の言葉は狂っていた。言語として成り立っているかも定かではない。

対照的にTHE執事は、それこそ、執事のように会釈をし丁寧な口調で言葉を発する。ハッスル。

しかし、これまたこの二人も狂っている。

爆発して炸裂したミサイルの中から、なんのことなく出てきたのだ。人外ともいえるレベルだろう。

しかし、そんなことは気にせず。

「な、軟派はちょっとー」

てきとーに答える。

「おzyつチャンかわいねエ」

「一つ私たちと遊びませんか」

何故か乗ってくれる二人。ノリがいいね、そういう敵は嫌いじゃないんだけどね。

「何して遊ぶんですかねエ、鬼ごっこ？　かくれんぼ？　それとも――殺し合い？」

「Sai goの選択shiがイイかな」

「私目も最後の選択肢にさせていただきましようか」

即答。まあ当たり前っちゃ当たり前なんだけど。

「いいねいいね。さあやろう、すぐやろう。正面切って卑怯にやろ

う」

「おA I手、死てm oらいmす又え」

「お手柔らかに」

私はハルコンネンを外し、何も無いところから、二振りの刀——日本刀——を取り出す。

それに対して、オカシな少女は見た目に似合わない——まあある意味一部分は似合っているのだろうが——ゴス服の中からファンシ——なヌイグルミの付いたショットガンを取り出す。

執事は紳士的な感じでフランベルジュを背中から取り出す。流石THE紳士。

二人は後衛と前衛の位置に付き、構え——

「レイス・クL Aイン——」

「アーロン・エインズワース——」

「「往^いかせてもらう！」」

——動き出す。

「クハハッ！！ 来なさい、潰してあげるわ」

私は刀を——構えない。

「あーら、もう終わり？ ふふっ」

時間で2分弱、といったところであろうか。たったそれだけの時間で、その場に立つは、青い髪の少女だけになっていた。

「化kえ……………MO……………」
「あり……………え……………ません」

ゴス服少女のショットガンは粉微塵に大破し、髭執事のフランベルジュは叩き折られていた。

戦闘が始まった当初は、二人組みが優勢になっているようにも見えた。

しかし、即座にその優勢は消える。否、もともと優勢などという状況はなかった。

二人組みの戦術は、基本的にはゴス服少女が後ろ、執事が前のオーダーソックスに、隙があればゴス服も前に出てゼロ距離でショットガンを放つ——という、変則的戦法。

知っての通り、ショットガンは武器の特性上相手との距離が近ければ近いほどダメージ、殺傷力が強い。

執事が接近戦で注意を引き付け、そのうちにゴス服が後ろに回りこみゼロ距離発射。

しかし、あるうことが、少女はそれを退けた。^{しりぞ}

弾丸切り。古来の剣豪は銃弾を刀で切ったといわれる。

ゴス服のショットガンから同時に放たれた扇状に広がる銃弾を、横薙ぎ一閃で全て叩ききった。

余談とも言えるかもしれないが、ゴス服は魔術を使えた。推定Gは20弱といったところか。世界でも屈指の程だろう。しかし、このゴス服は世間ではまったく知られていない。これほどのGを持つにも拘らず、知られていない。

何故なら、この二人組みはある組織のメンバーだからである。政府で言うなら、Sクラスの機密情報レベル。イ・ウー以上の禁忌の組織。知らなくていいものが知れば、確実に消される。存在した証拠さえも残らないかもしれないレベル。無論、家族なども消される。

話を戻そう。

ゴス服の魔術は、弾丸を意の儘に操る事が出来る。意の儘に、といっても限界があるのだが。

ショットガンから同時に放たれた銃弾6発を操れる程だ。単体戦闘ならこの上なく強い。

前述したように、ショットガンは距離が近いほど威力を発揮するのだが、この魔術によって、ゴス服が認識して操れる場所までは、その弾丸は自由自在に動き回り、標的を穿つことが出来る。

そう、だからそうしようとした。

一度扇状に広がった弾丸が、吸い込まれるようにして、少女に向かっていく。扇状に放たれるなら、ゼロ距離で無い限り数発は当たらず後方へと飛んでいくのだが、ゴス服の魔術によって本来当たらないはずの弾丸が少女と言う目標に向かって一点集中される。

その間0、数秒。

それを全て——一閃の元に叩き伏せた。

しかし、その程度でうろたえているほど、弱くは無い二人は、瞬時に判断し、距離を取る。その行動が二人の寿命をほんの少しばかり延ばした。

直前、二人がいた位置に、少女が持っていたはずの刀が突き刺さっていた。

はずしたか、と言う風に首を傾げる少女。

その姿に、二人は思わず戦慄していた。勝てない、絶対に勝てない。二人の動物的な本能が叫ぶ。

無垢な笑顔で、イビツな笑顔。相反するような二つの顔を同時に見せた少女に、恐怖していた。

狂っている、そうとしか思えなかった。狂った口調で喋るゴス服も、ただ目の前の少女に畏れを抱いていた。

その恐怖が二人の動きを衰えさせ、視野を狭くし、感覚を狂わせた。

たった一度だけ、本来なら確実に殺せた時があった。そう、普通のSランクのような武偵なら、普通の人間なら。殺せたはずの、必殺の一撃を入れられるはずだった。

少女は、恐怖しながらも必死に攻撃を加えていた執事に、一瞬だけ意識を集中させた。

それは普通の人間ならば気付かないような、ほんの僅かな一瞬。

その一瞬で人知を超越したような動きを見せたゴス服は、瞬時に少女の後ろに回りこみ、ショットガンの引き金を引いた。

殺った。そう思った。無論、ゴス服も執事も。

二人は少女を連れ去りに来たといったものの、生死は問わない、だが出来る限りは生きて捕らえろ、と言われていた。最初のうちは生きて捕らえられそうだと思っていたが、少女が強すぎた。いつの間にか、捕らえるために戦うのではなく、死なないで殺すために戦っていた。

一瞬の自分の油断に驚いたのか、少女は眉を顰めた。だが、それだけだ。

絶対不可視の一撃、速いなどではなく、人間的構造から根本的に見えない位置からの銃撃、避けられる筈が無い。

——はず、だった。

少女は口をニイとニヒルの様に歪めると、両手の刀をその場に落とし、弾丸の方を向いた。

狂った行為だ。尚更、避けられる可能性は減る。

しかしこの少女は、全ての予想、憶測、推測、観測を上回る。瞬間、ガガガガガガ、という何かが削れる音。

少女は、両手で二発ずつ、更に―――歯で二発の、合計6発、全ての弾丸を受け止めていた。

ありえない、その言葉さえも陳腐に見えるほど、少女は常軌を逸していた。

「中々頑張った方なんじゃないかしら」

青い髪の少女は、懷から一丁の拳銃を出し、倒れている二人の方
向へと歩いていく。

「ま、どうせその程度、ね」

その銃はバカみたいに大きい。そう、蔵義秋穂の持っていた銃と
同じ。

「ヤツがこんなときに送ってくるくらいだから、大したヤツラじゃ
ないと思ってたけど」

一歩ずつ、一歩ずつ、動けない二人に近寄っていく。

「おm A えハ……何なんだ？」

ゴス服は倒れ付しながらも、少女を睨みつける。その目に映るは、
ただ単純な恐怖。

「ええ……。何も聞いてないんだ」

「聞いても無いも何も、私達は貴女を連れて来いとかだけ命令されたもの……で……」

「教えてもいいんだけどさ——」

少女は一度言葉を切り、空を見上げる。

「——貴方たちを、殺さないといけなくなっちゃうから」

なんでもないという風に、少女は言った。

「しかし……どちらにしろ殺すのではないんです……か？」

「ま、そうなんだけどね。要は寿命の問題よ。今死ぬか、後で死ぬかってこと」

「それでしたら……今、聞いておくことにしましょう」

「うーん……」

少女はまたも、言葉を切る。今度はうーうー唸っている。

「一個だけ。一個だけ教えてあげるわ」

「……………」

「私の名前、分かってる？」

「……………サ……………ン……………ング」

「そう、それが私の名前」

執事の言葉は突如吹いた突風にかき消されたが、少女には聞き取れていた。

「その家は、数百年前に興おこったの。興したのは、見た目十数歳の少

女。その少女はありえないほどのお金を持っていた。更に、お金だけじゃなく、とんでもない力を持っていたのよ。まるで魔法のような」

「……………」

聞いている側である二人は喋っていない。既に、喋る気力も体力も無いのだ。

そんな二人を気にせず、少女は言葉を紡いでいく。

「でも、それは魔法じゃない。魔術でもないし、ましてや鬼道でもない。そう、確固たる経験と研鑽によつて鍛えられた努力の完成系。勿論、努力して強くなることに終わりはない。だからこそ、まだ鍛えている。……と、少し話がずれたわね。その少女はね、よわい年齢——

——2000を越えていたの。つまり、紀元前から生きているってことね」

「……？」

「そう、少女は人間じゃなかった。それこそ、化物だった。モンスター、クリーチャー、いろいろ言われたわ。その少女は、世界ではほぼ一人ぼっちだった。でも、そんな少女にも、一人だけ、同じく化物といわれた、兄がいたわ。でもある日、兄は変わってしまった」

「……………」

体力がないのか、喋る気も無いのか、口を挟みたくないのかは分からないが、二人は何も言わない。

「変わった、というのも違つかもしれないわね。本性を出した、というのが正しいかもしれないわ。ある日の夜、少女は寝ていると、何かおかしい気配を感じたわ。自分の体に、何かが乗っかっているような、ね」

少女はまたも違う方向を見やる。

「乗っかっていたというのは事実だった。それは、兄だった。少女が寝ている間に、兄が少女を襲って——態々（わざわざ）此处で隠す必要はないわね。——陵辱していたの。少女はすぐに兄を蹴飛ばして逃げ出したわ。心にあるは、恐怖と疑念。つい昨日まで優しかった兄が、たった一人の家族が、本能に負けて、自分を犯そうとした。その気持ち、少女の兄を蹴る足に力を込めさせたんでしょね。兄はすぐ近くにあった崖を落ちていったわ」

「なる……ほど……」

「Iya……」

「少女は逃げ出した。走って走って走って走って走った。中国の広大な砂漠を越え、奥羽山脈を越え、太平洋をヨットで横断し、南極をペンギンとともに走り、マダガスカルで動物の王になり、中東で石油を掘り当てて走ったわ」

「……!?」

先ほどとは完全に違う種類の驚きを露にする二人。

「激動の人生よ。それからは普通の人間と同じように生きたわ。人が老いるような時期になれば、ばれない様にその地から離れ、違うところに移り住む、そんな生活がつい最近まで続いたわ」

「Geきどウ過ぎ……LU……」

「そんなわけで、話はここで終わりよ。あと、此处テストに出るわよ?」

「先生……黒板で……書いていただけるとうれしいのですが……」

「アウトプットしとけ!」

「最後に……一つ、よろしいですか?」

「時間外質問は受け付けないんだけど、今回は特別よ?」

「ありがと……ございます。……貴女は……今まで如何程いかほどの人を

殺めてきましたか？」

ふむ、という風に手を顎に置く少女。その様はおっさんのそれである。

「君は今まで踏んだアリの数を覚えているかね？」

「！？」

「嘘嘘。……でも、分からないっていうのは本当よ。あっちなら顔ごと全部覚えてるかもしれないけど……。時には、街一つ、国一つを壊滅させた事もあったわ。ま、あっちには嫌なこと背負わせてるわね」

「……そう、ですか」

「それじゃ、さようなら」

パンパン！！

暗闇の中、二回の銃声が響く。本来、少女ならば一度の音で数回発砲できるのだが、戦った相手への気持ちなのか、ゆっくりと二回、引き金を引いた。

「まだ……終わらない。この手はいつまで血で汚れるのか。終わりはあるのか……。わからない。でも……アイツをぶち殺すまでは……止まらない」

そんなとき、私の目に二つの極小の何かが移った。

恐らく、偵察用の小型盗撮機だろう。

パン！

今度は一回の銃声。それで二つの小さなハエのような機械は木端微塵に弾ける。

「一つはアイツ……もう一つ……は？ アイツなら二つも飛ばさな

いだろう。恐らく、他の誰か、か。まあいいや。いつ分かるでしょう」

『外す事の無い恋の魔弾を』』

レキからの着信音。蔵義秋穂の携帯電話とまったく同じ携帯電話を取り出す。

「もつしもし」

『今は、貴女？』

「そうよ。で、ご用件は」

『今から、ANN600便が空き地島そいに不時着する』

「ハア？ 何でよ。私ちゃんとミサイル叩き落したわよ。羽田に折り返せばいいじゃない」

『自衛隊が、いる』

「……バカじゃないの。……もう、面倒くさいわね。いいわ、

私が止める。誰も空き地島こいに近づかせないようにして」
『わかった』

プツと着信が切られる。

私は、またもや何も無い場所から黒い——コートを取り出す。それを着、備える。

V2を撃墜したときの火がまだ聞いていないから場所は分かるだろう。あとはキンジの腕だ。

sideキンジ

『——というわけだ。空き地島は火で光が点ってる。あとは何か知らんがレキは適当に行っても大丈夫だっていつてる』

俺は武藤の指示を聞き、首を傾げる。

「キンジ、どういふことかしらね」

「わからん。レキがいうのなら大丈夫だろう。行くぞアリア、揺れに備えてくれ」

「分かったわ!」

武藤の言うとおり、空き地島は燃えていた。火の明かりのお陰で着陸場所は大体分かった。

そんな中、空き地島の上に一人の人影を見つける。

「アリア! 空き地島の上に誰がいるぞ!」

「何ですって!?!」

『大丈夫です。そのまま着陸してください』

「何を言って――」

『心配ありません』

レキには珍しく、強い口調で言ってきた。

よく見ればその人影、この間バスジャックの時にバスを片手で止めた人と同じコートを着ていた。

「ちっ……。行くしかない!」

「キンジ、頑張つて!」

「ああ、分かってるさアリア!」

徐々に高度を落とし、空き地島に向かっていくANN600便。

「うおおおおおおおおお!……!……!」

その人影は、バスをとめたときと同じように片手を前に出し、
——バスをとめたときと同じように、見事にANN600便
を片手で受け止めた。

「はあつ。ほんつと、キンジ……お疲れ様」

「ああ、お疲れ様、アリア」

Side EX

ふう、と私は溜息をつく。

流石飛行機、ちよつとばかり腕がヒリヒリする。まあ、その程度
なんだけど。

とりあえず、誰かに見つかる前に此処から避難したいんだけど、
死体があるからすぐにこの場を離れるわけにはいかない。

私は二つの死体を片手で掴む。死体というのは、人間が常時入
れている力が入っていないもんだから、ある程度は重い。……飛行機
に比べたら軽いけど。いや、飛行機と比べた時点でおかしいね。

では、退散しますか。あゝばよつと。

翌日

「ふあ……ああ」

ああ、超眠い。いろいろ事後処理とかあつて、結局昨日寝た時間
は30分程度。寝たつていえねー。あ、今放課後。此処女子寮の屋
上。

「秋穂、眠いの？」

「そんなことな……い……ふあああ」

俺の隣にいたレキが優しい声で聞いてくる。レキが隣にいたら眠気だってなんのその。ギンギンですがなー。いや、何がとは言わないけど。俺だって男の娘ですたい。間違えた、男の子ね。
でも……眠い。

「眠気と体のダルさで俺の寿命がマッハ」

「やっぱり眠いでしょ？」

「……そんなことないってー。ふにゃあゝあ。やっぱり眠い。レキ、ぶりーず膝マクウラ」

「……バカ。ほら」

レキは体育座りしていた両足を崩し、女の子座りになる。

「おやすみいゝ。zzz……」

「……早い。……可愛い、かな」

レキは笑みを作り、秋穂の青く長いポニーテイルの髪をそつと撫で、自分も眠りについた。

「ふにゅうゝ……zzz……もう……ああ、レキい……激しいよう

ゝ」

「ぶっ！」

レキは結局寝ることは出来なかった。その後は、ずっと秋穂の髪を撫でたり弄ったりしていたような。

そうそう、後で聞いたんだけど、いろいろあってキングジがアリアのパートナーになったらしいね。

これで『お仕事』は順調ってところかな。ま、二人には頑張ってる欲しいもんだ。友達としても、ね。

はあ……レキい……ふにゆう。

アホな電波を受信しながら、俺は深い深い眠りに落ちていった。

「……zzz……アー……サー……ヴァン……ヘル……シン……zzz……お腹一杯……」

なんとも基本と変わらない寝言と、謎の言葉は誰にも聞こえる事はなかった。

— F i r s t d a y s 完

第九弾（後書き）

青い髪の少女？社長の嫁じゃありませんよ！

そんなこんなで、9・5部目です。此処までの内容いかがでしたでしょうか？

というわけで、一章目であるFirst daysはここで終了です。そして、ここから約一ヶ月の更新凍結に入ります。

お楽しみにしていただいている方、本当に申し訳ありません。理由としては、他の小説との両立のためです。どうか、お察しください。

そして、次回更新の一発目は、閑話休題を挟みたいと思います。

次章、Second daysもお楽しみに！ 尚、二巻であるうがなんであろうがヒロインはレキです。星伽とかナニソレおいしいの？そんなのはキンジに食わせておけ。

今回登場したハルコンネン？ですが、軽くネットでggれば画像くらいヒットすると思います。分かる人は分かると思いますけどね。参考としては、HELLSINGと調べるかヘルシングと調べるかしていただければ。

尚、銃器についてはブラックラグーンだったり、そういうのを流用させていただいております。

では、次章でお会いできることを楽しみにしています。皆さん、グッドラック。また会いましょう。

秋穂の御旗の元に。

随時、感想、要望、批評をお待ちしております。
評価もしてくださるとうれしいです！

運営からのお知らせにより、歌詞転載の規制が強化……というか、
改めて敷かれましたので今回の話しに出てきた『魔弾』の歌詞を全
て『』表記にしました。ご容赦の程を。

間弾（前書き）

どうも、お久しぶりです。

一ヶ月の停止とか言いながら2ヶ月以上たってますね。とっても反省してマース

ごめんなさいほんとうにごめんなしあーッハッハッハ！

本当のところ、反省をしていたりしていますメイビー！。

今回は、前回（いつの話だし）お話したとおり閑話！

暗躍とか、新フラとか書いてて色々先が思いやられる感じに仕上がりました。

そして、閑話ゆえ本文がアンリミテッドに短いですが、そこら辺はご容赦の程を。

もうたぶん書き忘れてること無いよね……？うん。

あ、感想の返信はコレを投稿した後にしますのでっ！

どうぞどうぞ。

間弾

間弾

『中二病』『秘められた気持ち』『暗躍』――

??? side

どこか、暗い部屋。其処には、二つの人影があつた。

「偵察機とV2は破壊された模様です。然りて、送り込んだ二人も」
「……ふむ。やはり失敗したか……」

失敗した、というわりにはあつさりといった様子で呟く、見た目
18歳位の男。

「貴方様の妹君です故……。至極当然の結果かと」

執事のような喋り方をする、12歳ほどの少年。

「確かに、な。あの程度の駒で倒せる様な者であれば、私が気にか
ける必要は無い……か」

「何故それほどまでに、彼奴に……？ 貴方様を瀕死に追い込んだ
者なのでしょう」

「……妹だからな」（キリッ

「キリッて何ですか……」

「兄とはそういうものだ。あの時は……つい、こつ……ムラムラ……
つと……」

「そうですか」

まるで、もうどうでもいいかのように受け答える少年。

「まあ、いい。私たちの【曲】はまだまだ序盤だ……。 ”彼女” に
は【輪舞曲^{ワルツ}】を……踊ってもらおう」
「……了解しました」

誰も知らない水面下で、思惑は……進行していく。

「ところで、この部屋の電気はどうにかならないのか」

「電気を止められています故……」

「節電……計画停電、というやつか……」

「いえ、電気代の未払いです」

「……そうか」

電気の止まった部屋で……世界を揺るがす計画は進行していく。

諜報科 side

「中々面白いじゃないか……」

青い少女がV2を撃墜し、二人の刺客を葬った夜、諜報科に備え付けのPCの前で一人の男が荒い息を立て、画面を見つめていた。

「銃撃でミサイルを一瞬にして破壊し……その中から現れた化物のような人間二人を一瞬にして殺す、か。更に、ミリ級の小型偵察機を裸眼で視認して破壊……。調べてみる価値がありそうだな……。ク、クククク……クハハハハ！」

暗闇の中、男の笑い声が木霊する。

好奇心、猫を殺す。この男は後に、その言葉を我が身に受ける事となる。

尋問科・尋問室

「アンタにいい、星伽からの依頼だそうですよ」

気だるそうに、怪しい匂いを漂わせた煙草を吸いながら相手に敬語を使って話しかけるのは、綴 梅子。

綴は、世界でも有数の尋問官であり、彼女が尋問をすればどんなに口が堅い犯罪者でも喋ってしまう、とまで言われるほどの腕前である。

その性格は、残忍……というか、容赦がなく生徒に平気で根性焼きをしたりするとも言われている。

そんな綴が敬語を使うほどの相手、それはつまり綴より上の立場、若しくは強い者であるうということに、想像は難しくない。

「星伽からねえ……どうせまた面倒なことだろ……」

そう答えるのは、我等が主人公。青い髪をポニーテールで纏めた、この頃流行の男の娘。

蔵義秋穂、その人である。

「まア、そうなんじゃないですかあ。今回の相手は——」

デュランダル
「魔剣、だろ？」

「……知ってたのかア。なら話は早いんじゃないですかあねえ」

「星伽白雪の護衛……ねえ」

「そオいうことですよあー。コレ、資料でっさーあ」

ぱらぱらと、受け取った資料を捲る秋穂。

最後のページまで捲り終えた秋穂は、その資料を横においてあったゴミ箱に、ポイと捨てた。

「あーらあ……別にー私はどうでもいいんだけどさー。一応お機密ぶ……ぶ……そうそう文書なんですしいー、シュレッダーだったりにかけてから捨てて貰えませんかーねえ」

「しょうも無い単語を忘れるなよ……。ま、いいや。どっこいしょーっと」

綴に負けず劣らず気だるそうに、秋穂は懷からJACKALを取

り出し、何の迷うそぶりも無く

ガンガン！

と、ゴミ箱に弾丸を放った。

「これでいいかー？」

「あー……まあいいんじゃないかなー？」

残念ながら、ズレタ二人の会話に突っ込めるものはこの場には居なかった。

「でもお、魔剣^{デュランダル}って本当にいるかどうかなんて分からないんですけどー。そこら辺はア、どうなんですかあ？」

「綴よう、お前神話とかそういうの嫌いか？」

「あるかどうか分からない話なんてエ、興味ありませんよーお」

「だろうな。ま、気になるんだったら調べてみればいいさ」

「暇があったら調べてみますかあ。あー、そうそう」

綴は吸っていた煙草？を灰皿に押し付け、火を消しながら座った目を秋穂に向ける。

「今度ー、ちょっと付き合ってもらってもいいですかーあ？」

「ああ、別にいいぞー。そいじゃ、ありがとなー」

感謝の言葉を言い、秋穂は尋問室のドアを開け出て行った。

秋穂が出て行って数分後、綴は懷から普通の煙草^{セツタ}を取り出し、火をつけた。

それを啜えると、ボーっと危険な目を天井に向けて呟く。

「あー……誘っちゃったー……ははア……。私らしくも無い……か

……ふうー。美味い飯屋でも探すかア……」

秋穂は知らない。

恐怖の対象とされるこの女に、（あるかどうかは不明だが）生徒と教師間での気持ちではなく、男と女という性別で少なからず好かれていてることを。

綴は立ち上がり、教務科へと足を運んでいった。

見たものによつては、ある種、恐怖を抱くような笑顔で、軽く鼻歌を歌いながら。

蔵義 秋穂 side

「魔剣……か。なあ、ジャンヌ……。お前の子は……。何処で間違えちまったんだろうなあ……。俺は……。いや……。彼女は……。それを許せるのかな」

尋問科から出てきた秋穂は、寂しそうに呟く。

ふー、と溜息を着いた瞬間、秋穂の顔が蒼白になり、呼吸が荒くなる。

さらに、ポニーテールを纏める紐が、何かに呼応するかのように、ほのかに淡く光る

「……つつ」

小さな唸り声をあげた秋穂は、震える手でポケットの中から瓶を取り出す。

その中に入った錠剤を二錠取り出し、口に入れる。

「ふう……。時が近い……。か……」

錠剤を口に入れると、途端に落ち着く秋穂。

「くそう……。これじゃ丸つきり中二病患者じゃねえか……」

秋穂は先ほどとは違った寂しさを漂わせながら、寮への帰路に着いた。

間弾（後書き）

どうでもいい話ですが、PSNが完全復帰しましたね。
友達にパスワード変更のやり方を聞かれたので教えようと思い、ま
ずサイトに「サインイン」して……と書こうとしたら「サイン淫」
に変換してしまった自分に自己嫌悪しました。

……って本当にどうでもいい話でした。ゴメンナサイ。
次回の更新はいつだか分かりません。そして次回からは2巻の内容
に入ります。

O T A N O S H I M I N I

B Y E !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2782s/>

?測定不能?の『E』

2011年8月1日01時04分発行